HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル帝国の北西イラン支配とオルベリヤン家の台頭
Author(s)	北川, 誠一
Citation	北海道大學文學部紀要, 26(2), 49-112
Issue Date	1978-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33422
Type	bulletin (article)
File Information	26(2)_P49-112.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

モンゴル帝国の北西イラン支配と
オルベリヤン家の台頭

北川誠一

モンゴル帝国の北西イラン支配とオルベリヤン家の台頭

北川誠一

目次

はじめに
第一章　スィウニクーオルベリヤン家の動向
　第一節　モンゴル軍のスィウニク征服とオルベリヤン家の所領支配権
　第二節　一四―一五世紀初頭の所領支配権継承と一族の系譜
第二章　所領の形成と分布
　第一節　新所領の境界
　第二節　オルベリヤン家領の帰属
第三章　近隣諸侯との関係と婚姻政策
第四章　グルジア王とオルベリヤン家
結　論

はじめに

一三世紀中葉に西アジアを征服したモンゴル人は、ホラズム帝国、イスマーイール派教団、アッバース朝カリフ政権、アーザルバーイジャーンのエルディグズ朝等の諸勢力を一掃した。また、イル＝ハンの統治下にケルマーンのカラキタイ朝、ファールスのサルガル朝、ルーム＝セルジュク朝等が統治権を失ったが、これらを除いて、政権樹立の事情、内部の社会構造、モンゴル人との関係等々について様々な性格を持つ多くの地方政権は、概ねチムールの侵入まで政治生命をながらえた。[1] イル＝ハン国では、中国本土で実施された世侯の官僚化、世侯領版籍の奉還のごとき政策は採られず、[2] かえって、ヘラートのクルト朝、ファールスのインジュー朝、イスファハーンのムザッファル朝等の地方政権がモンゴル人の支持のもとに樹立され、存続した。

モンゴル人がイラン各地で地方政権の存続を承認した理由の一つに、辺防が挙げられるであろう。第二代のイル＝ハンであったアバカは、シャムスッディーン・クルトが、一二七〇―一二七一年ホラサンに侵入したチャガタイ＝ハン国主バラークの召集に応じたことを理由に、ヘラートを破壊しようとした。この時財務長官シャムスッディーン・ジュヴァイニーが「マレク・シャムスを敵に廻せば、我が軍はインド、トルキスタンからの攻撃にさらされ、ホラサン州は危い」ことを主張したので、ヘラートは破壊を免れた。[3]

同様の事情は、キプチャク＝ハン国との係争地であったカフカース方面にもあった。一二六一年にフラグ＝ハンが、グルジア王ダヴィティ（Daviti）の反乱に怒り、捕虜としていた王子ディミトリ（Dimitri）を殺害しようとした時、イラン総督アルグン＝アカとハンの妃ドゥクズ＝ハトゥンは、予言者ダビデの子孫を殺害することの非を説き、更に

王を敵に廻せば、グルジア人はカフカース山中のダリヤル峠を開いてキプチャク＝ハン国軍をイランに導き入れる危険があるので、軍使を派遣して王を召撫する以外に策はないことを上奏した（Brosset, I, 562-563）。イル＝ハンはクルト朝と同様にグルジア王国についても国境防備上の重要性を理解し、敵国に対する障壁とするよう試みたのである。ダヴィティ四世、ダヴィティ五世、ディミトリ二世、ダヴィティ六世等歴代諸王の反乱にもかかわらず、バグラト（Bagrationi）家の王統が廃されることなく続いたのは、モンゴル人政権にグルジア王国の組織とバグラト家の王権を存続させる政策が採られていたとみなしてよいであろう。[5] しかし、グルジア国内の政情は安定せず、王権の衰退と有力諸侯の動揺がみられたのも知られるとうりである（Allen, pp. 109-120）。

イル＝ハン国は各地方に州（vilāyat）を置いたが、その知事（ḥākim）は、徴税官（mutaṣarrif）を兼ね、徴収した租税を中央官庁に送付したり、使者のもたらす支払命令書の額を支払っていた。ガザン＝ハンの宰相を勤めた歴史家ラシードウッディーンは、従来この職務にあたっていた地方の名家が徴税請負制の弊害で次第に没落し、彼等に替って素姓の卑しい人々がその地位を得るようになった、と言う。[6] イル＝ハン国の地方統治、徴税制度と在地勢力との関係が示唆されると共に、地域社会内部に支配構造の変動が生じ、旧支配者の没落と新しい支配者の台頭が起った事情が語られている。グルジア王ダヴィティ五世反乱の理由が重税に対する不満であり、ディミトリ二世が滞納した税額支払の為に王領地の一部をアルツルニ家のサドゥン（Sadun Artsruni）に譲与せざるを得なかったなどの事情より判断すると、グルジアにおいてもラシードウッディーンがイラン各地で目にしたような原因によって、旧来の支配機構の混乱が生じていたのである。

アルツルニ家の台頭を例に取ろう。グルジア王の諸侯ザカリヤン家のアヴァグ（Awag Zak'arean）の家臣であった

サドゥンの政治的地位はイル＝ハン国の初期に上昇し、グルジア王国の国制とは無関係にイル＝ハンから直接所領を与えられ、タルハン（苔刺罕 Per., tarkhān; Arm., t'arkhan）の身分を得た。サドゥンとむすこフトルブガ（Khutlu Bugha）は、イル＝ハンの支持のもとに、主家ザカリヤン家を凌いでグルジア王の摂政(atabegi)、王国軍最高司令官（amir spasalari）の栄職を獲得し、国政の実権を掌握したのである。

さて、一三世紀グルジア王国の政治史において、アルツルニ家と競合する関係にあり、併せて論ずべきであるのはスィウニク[7]（Siwnik'）の領主オルベリヤン（Ōrbēlean）家である。[8] オルベリアン家はチェナスタン（Chenastan. 字義通りには中国を指す。）から、渡来したという伝承を持つ旧家で、[9] 同じく東方起源が主張されているマミコニヤン（Mamikonean）家の傍系とみなされる。[10] この一族の中心となった世襲領はグルジア中央部のオルベティ[11]（Geor., Orbeti; Arm., Ōrbēt'）であった。一一世紀初頭、統一グルジア王国が成立した時、彼等は既に強力な地歩を確立していた。「彼等はメスヘティ（Meskheti）高地の大部分とイメレティ（Imereti）の広大なアルグェティ（Argueti）地方の主人であり、トリアレティ（Trialeti）におけるオルベリヤン一族の所領は（Lori）の独立公国に境を接し、北東ではカヘティ（Kakheti）とヘレティ（Hereti）の古い王国と隣接した（Allen, p. 85）」のである。この一族の当主は王国最大の諸侯として最高司令官たるスパサラリ（spasalari）の地位を世襲し、セルジュク＝トルコ人の侵入に対する抵抗においても、セルジュク朝の遺産たる諸君主国に対する再征服の戦争においても指導的な役割を果した。

しかし、王権に匹敵したオルベリヤン家の勢力は、一一七七年一挙に崩壊する。この年イヴァネ・オルベリ（Ivane Ōrbeli）は先王ダヴィティ三世（在位一一五四―一一五六年）の遺児デムナ（Demna, Dimitri）を擁立して当時の国王ギオルギ（Giorgi）三世（在位一一五六―一一八四）に対して反乱の兵を挙げたが、王のキプチャク人騎兵隊のた

めに敗北したのである。彼は弟リパリト（Liparit）五世とその二人のむすこエリクム（Elikum）、イヴァネをタブリーズのアタベク＝エルディグズのもとに遣していた。リパリトは反撃の希望を失ってアーザルバーイジャーンに客死したが、エリクムはエルディグズの後継者に仕え、好遇を得た。ハマダーンに領地を与えられ、イスファハーン、レイ、カズヴィーンの総督（amiray ew k'aghak'apet）に任命されたが、後に故郷に近いナフチヴァーン（Per., Nakhchivān, Nakhjivān; Arm., Nakhchavan, Nakhichevan, etc.）に領地を望んでかなえられ、エルンジャク（Yernjak）、チャフク（Chahuk）、カラスラフ（Kalasrah）を与えられ、この地方の知事（goltsakal ew zōrdlukh）に任命された。彼がアルラーンのガンゾァク（Arm., Gandzak'; Per., Ganja）で戦死すると、妻アスパ（Asp'ay）はナフチヴァーンで回教徒と再婚し、遺児リパリトは回教徒として養育された。後に母子はアルメニア教会のスィウニク主教ステパノス（Step'annos）の勧めでヴァヨツヴォル（Vayots'dzor）に逃れた。グルジア王のアタベギであったイヴァネ・ザカリヤンは、リパリトにスィウニク地方のいくつかの村落を与え、この地方の知事（goltsakal）に任命した。この地方がモンゴル人の来寇を被るのはリパリトのむすこエリクムの時である。(12)

このように一一―一二世紀のオルベリヤン家の活動が良く知られ、専論も数えられるのに対し、一三―一四世紀モンゴル人政権下における動向について記されるところは少い。僅かにババヤン（L. O. Babayan）がモンゴル人支配下のグルジア王国領アルメニアの諸侯間における政治的主導権の推移を論ずる中でリパリトの子スムバト（Smbat）の活動について次のように述べる。エリクムはモンゴル人部将アスラン＝ノヤンに降伏するが、エリクムの死後弟スムバトはグルジア王のアタベギであったアヴァグの寡婦ゴンツァ（Gonts'a）の横領から所領を守る為にモンケ皇帝の庇護を仰ぎ、バイジュ＝ノヤンの軍事援助を得て、スィウニク地方において、ヴォロトン（Vorotn～Vorotan）か

らボロトン(Borotn)、ブゲン(Bghen)に至る地域、エゲギク(Eghegik')、ヴァヨツヅォル、ポシャンク(Poshaank')、ウルツ(Urts')、イェレヴァン(Yerevan)までのヴェディ(Vedi)、コタイク(Kotayk')、ゲガルクニク(Gegarkunik')の主要部の各地を征服した。これによってアヴァグ領、プロシャン(Prhoshean)或いはハグバキャン—プロシャン(Khaghbakean-Prhoshean)家領、バチューチャン(Bach'ut'ean)家領の一部を併合することとなり、彼等のスムバトに対する攻撃の理由となった。一二五六年スムバトは再度カラコルムに赴いて所領安堵の詔勅を得ると、ザカリヤシ家からもバグラト王朝からも独立し、王を称した。彼は帰国後、敵対者に報復したが、これは一二五九—一二六一年のグルジア反乱の原因となった。他の諸侯に対するスムバトの優位はフラグ＝ハンの死亡(一二五六年)まで続いたが、アバガ＝ハンの即位後は、その地位をサドゥン・アルツルニに奪われた(Бабаян, стр. 132-141)。スムバトの弟タルサイチ(Tarsayich)はアルグン＝ハンの治下に旧アヴァグ領統治権とアタベギ職を得、グルジア王国の有力者の一人であった。タルサイチをむすこエリクムが継いだ。エリクムの後継者ブルテル(Burt'el)は、「大グラブ(graf)」、「諸侯中の諸侯」を称し、アミルスパサラル、スィウニクートゥマンの支配者の地位を得た。彼等の子孫はチムール朝に滅されるまでスィウニクに存続した(там же, стр. 180-183)。ババヤンの記述は、一二八〇年代までのグルジア王国領北東アルメニア諸侯間の政治的主導権の推移をモンゴル人の占領地支配政策に結びつけた興味深いものであるが、同家の多様な政治活動の全体が考察の対象とされているのではなく、基礎的な歴史事実には証明されていないものも多い。

本稿は、オルベリヤン家の活動を手がかりとして、イル＝ハン国の地方支配体制とバグラト朝の国家構造との関係を解明することを主たる課題とする。このために、モンゴル帝国からチムール朝に至る同家の動向をモンゴル人との

交渉を中心に年次を追って明らかにし、次に所領形成の過程とその分布、並びにイル＝ハン国の地方行政区画との関係を示そう。また近隣諸侯、グルジア王との政治的関係を分析し、同家所領支配権の性格について述べよう。[13]

転字（TRANSLITERATION）

アルメニア語（Armenian）；

Ա	ա	a	Կ	կ	k
Բ	բ	b	Հ	հ	h
Գ	գ	g	Ձ	ձ	dz
Դ	դ	d	Ղ	ղ	gh
Ե	ե	e	Ճ	ճ	ch
Զ	զ	z	Մ	մ	m
Է	է	ē	Յ	յ	y
Ը	ը	ĕ	Ն	ն	n
Թ	թ	t‘	Շ	շ	sh
Ժ	ժ	zh	Ո	ո	o
Ի	ի	i	Չ	չ	ch‘
Լ	լ	l	Պ	պ	p
Խ	խ	kh	Ջ	ջ	j
Ծ	ծ	ts	Ռ	ռ	rh
Ս	ս	s	Վ	վ	v
Տ	տ	t	Ր	ր	r
Ց	ց	ts‘	Ւ	ւ	w
Փ	փ	p‘	Ք	ք	k‘
Օ	օ	ō	Ֆ	ֆ	f

i　語頭のOは“vo”と記す。

ii　語頭の“y”は“h”と読む。（例 Yakob〈ヨブ）

iii　語尾の“ay”は“a”と読む。

iv　姓の語尾表記はそれぞれの場合による（例 Yovannēsean, Babayan, Sanjian）が、ヤンと記す。

v　発音は引用文を例外として東部方言にもとづく。

グルジア語（Georgian）；

ჰ	h	ღ	gh
ჯ	j	ყ	q
ჩ	ch	შ	sh
ცხ	kh	ძ	dz
წ	ts	ჭ	ch
ჭ	t'	ხ	kh
ჟ	zh	ჩ	ch'
ტ	t	პ	p'
ფ	p	ქ	k'
უ	u	ტ	t'
ფ	p'	ც	ts'
ქ	k'	ფ	p'
რ	r	ქ	k'
ს	s	ტ	t'
ტ	t	,,	'
უ	u	,,	'
ფ	p'	,,	'
ქ	k'	,,	'
ღ	gh	,,	'

ა	a	ნ	n
ბ	b	ო	o
გ	g	პ	p
დ	d	ჟ	zh
ე	e	რ	r
ვ	v	ს	s
ზ	z	ტ	t
თ	t'	უ	u
ი	i	ფ	p'
კ	k	ქ	k'
ლ	l	,,	'
მ	m	,,	'

i　個有名詞の接尾辞“-i”は、どのような場合にも落とさなかった。すなわち Mep'e Vakhtangi も Vakhtang Mep'e もともにヴァフタンギ王と記した。（C. F., Allen, xxii）

List of abbreviations and selected bibliography（本稿に用いた文献の省略形は下記の如くである。）

Allen ; W. E. D. Allen, A *History of Georgian People*, London, 1932.

Altunian ; G. Altunian, *Die Mongolen und ihre Eroberungen in Kaukasischen und Kleinasiatischen Ländern im XIII Jahrhundert*, Berlin, 1911.

Атрас Армянская ССР., Ереван и Москва, 1962.

Бабаян ; Л. О. Бабаян, *Социалью-Экономическая и политическая История Армении в XIII-XIV веках*, Москва, 1969.

Blake and Frye ; R. P. Blake and R. N. Frye, eds. and transls., " History of the Nation of the Archers by Grigor of of Akanc'," *Harvard Journal of* Asian Studies, vol. 12, pp. 269-443.

Mécérian ; J. Mécérian, *Histoire et institution de l'église armenienne*, Beyrout, 1965.

Minorsky ; V. Minorsky, " Caucasica II," *BSOAS* XIII, 1951.

Nève ; " Exposé des guerres de Tamerlan et de Schah-Rokh dans l'Asie occidentale, D'aprés la chronique arménienne inédite de Thomas de Medzoph," Académie royal des beau-arts de Belgique, *Mémoires couronnés* (Brussels), vol. II (1861), no. 4.

d'Ohsson ; C. M. d'Ohsson, *Histoire des Mongols*, 4 tomes, 1834-1845, la Haye et Amsterdam.（民國二九年天津影印）

S. Rhōshk'ay, *Zhamanakagrut'iwn kam Tarekank' Yekegheats'akank'*（『教會年代記』）, Vienna, 1964.

Shahnazarean ; K. Shahnazarean, *Patmut'iwn Nahangin Sisakan, arareal Step'annosi Ōrbērean Ark' Episkoposi Siwneats'*, 2 tomes., P'ariz, 1959.

Hakobian ; V. A. Hakobian, *Manr Zhamanagrut'iwnner XIII-XVIII DD.*（『小年代記集成一三—一八世紀』）

2 vols., Yerevan, 1951–1956.

Hübschmann ; H. Hübschmann, *Die altarmenischen Ortsnamen*, rep., Amstedam, 1969.,

H. Zh. P. ; *Hay Zhoghovardi Patmut'iwn, h. IV* (『アルメニア民族史』第四巻) Yerevan, 1972.

Juvainī/Boyle ; J. A. Boyle, *The History of the World-Conqueror by Ala-ad-din 'Ata-Malik Juvaini*, 2 vols., Manchester, 1958.

Kostaneants' ; K. Kostaneants', *Vitakan Taregir* (『古典年代記』) St. Petersburg, 1913.

Brosset ; M. F. Brosset, *Histoire de la Géorgie depuis antiquité jusqu'au XIXe siècle*, 7 tomes, S.-Pétersbourg, 1849–1851.

BSOAS ; *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, University of London

Mustaufī ; Ḥamd Allah Mustaufī, *Nozhat* al-*Qulūb*, Ed. by M. Dabīr Siyaqī, Tehrān, 1336 shamsī.

Dulaurier ; "Les Mongols d'après les historien arméniens," *Journal Asiatique*, 1858, pp. 192–255, 426–508.

Галстян ; А. Г. Галстян, *Армянские источники о Монголах*, Москва, 1962.

P. Gulesserian, T. Poladian tr., *The Armenian Church*, New York, rep. 1970.

Sanjian ; A. K. Sanjian, *Colophons of Armenian Manuscripts, 1301–1480*, Cambridge, Mass., 1969.

Saint-Martin ; M. J. Saint-Martin, *Mémoires historiques et géographiques sur Arménie*, 2 tomes, Paris, 1819.

Spuler ; *Die Mongolen in Iran*, 3 verbessert und erweiterte Ausflage Berlin, 1968.

Toumanoff ; C. Toumanoff, "The Fifteenth Century Bagratids and the Institution of Collegial Sovernity in Georgia," *Traditio*, VII, 1949.

Ulubabayan ; B. A. Ulubabayan, *Khach'eni Ishkhanut'yunč X–XVI Darerun* (『十〇—十六世紀のくちハンの諸侯領』) Yerevan, 1975.

Yovhannēsean ; H. M. V. Yovhannēsean, *Haykakan Berdeřě*（『アルメニアの城塞』）、Venetik, 1970.

註

（1）イル＝ハン国期のイランの地方王朝については、H. H. Howorth, *History of the Mongols*, part III, London, 1888, pp. 687–757; Spuler, S 139–216; 'A. *Iqbal, Ta'rīh-i Mufaṣṣal-i Īrān*, jild-i I, Chāp-i 2, Tabrīz, 1962, pp. 364–478 参照。

（2）愛宕松男「李壇の叛乱とその政治的意義」（『東洋史研究』第六巻第四号）。愛宕松男「蒙古人政権治下の漢地における版籍の問題」（『羽田記念論叢』昭和二五年）。井の崎隆興「蒙古朝治下における漢人世侯」（『史林』第三七巻六号）。村上正二「元代社会の中心的諸問題」「社会経済史学」第三一巻一—五合併号）

（3）本田實信「くラートのクルド政権の成立」（『東洋史研究』第二一巻四号）一八六頁。

（4）バグラト家はダビデの子孫であることを主張していた。グルジア王バグラティ（Bagrati）五世（在位一三六〇—一三九五年はチムールに対し、予言者ダビデが造ったと言う鎖帷子を献上している（M. 'Abbāsī, ed., Sharf al-Dīn Yazdī, *Ẓafar Nāma*, Jild-I, 1336 shamsī, Tehrān, ṣ. 297）。

（5）拙稿「オルジタイ＝ハトゥン降嫁の事情（一）」（『史朋』第二号）。

（6）本田實信「ガザン＝カンの税制改革」『北海道大学文学部紀要』一〇号、九三頁。

（7）スィウニク又はスィサカン（Sisakan）と呼ばれるアルメニアのセヴァン湖とアラクス河の間の地域は、ギリシャ語で Σακασηνή、ラテン語で Sacasene、近世ペルシャ語で Sisakān、アラビア語で Sīsajān と称される（Sanjian, p. 418; Hübschmann, S. 263–266; Н. Адонц, Армения в эпоху Юстиниана, изд. второе, Ереван, 1971, стр. 420–422）また、特にこの東部をスィウニク、西部をヴァヨツヴォルと分けて呼ぶ場合もある。この州（nanang）は、伝統的に一二の地区（gawarh）から成るとされ、それらは Yernjak（現在の名称は Alēncha）, Chahuk（現在の Jahuk, Jahri), Vayots'dzor（Eghegeats'dzor, 又は Eghegnadzor と Daralegeaz), Geghark'uni（Geghakuni), Sotk'（Sotk', Zawdēk), Aghahechk'（Zankeadzor の大部分を占める。Goris 周辺）、Dzghuk', Haband（ザンケアヅォルの一部), Baghk'（現在の Kapan, 或いは Ghapan の大部分), Dzork', Arewink'（Meghri 周辺。トルコ語の Kēnauz), Kōsakan（Kovsakan, Ordubat）である（Hübschmann, S. 341; Yovhannēsean, pp. 346–348; Saint-Martin, II, 318–394, 365）。しかしステパノス・オルベリヤンの年代記では Baghk'

を二分して Baghk' と K'ashnik' を、Tsghuk' を二分して Tsghuk' と Aylah を置いている (Shanhnazarian, I, 259-273)。

(8) 一族の呼称は、古く地名オルベティ (Orbet'i) から採ったオルベリ (Orbeli) が用いられたが次第にオルベリアニ (Orbeliani) が用いられるようになった。オルベリヤン (Ōrbēlean) はそのアルメニア語形である (Toumanoff, p. 179 n.)。

(9) Saint-Martin, *Dissertation sur l'origine de la famille des Orpelians* (Saint-Martin, I, 15-55).

(10) トゥマノフ (Toumanoff, p. 179 n.) はオルベリヤン家のマミコニャン家起源に関する一連の文献リストを揚げる。なお、マミコニャン家のチェナスタン起源説とアルメニア語史書に見えるチェン人については、榎一雄「初期アルメニア史書に見えるエフタルとクシャン」(『東洋学報』第四七巻四号) がある。

(11) 首都トビリスィ (チフリス) の西南約八〇キロメートルに存在するシャムシヴィルデ (Shamshvilde, Shamshoilde)。

(12) Minorsky, pp. 874-877; Minorsky, *Studies in Caucasian History*, London, 1953, pp. 79-106; R. Metreveli, *Shina-Klasobrivi Brdzora P'eodalur Sak'artveloshi XII Saukune* (『封建グルジアの階級内闘争 — 一二世紀』), Tbilisi, 1973; М. Д. Лордкипанидзе, *История Грузии XI-начало XIII века*, Тбилиси, 1974, стр. 127-141。また、一一七七年の反乱に関する最近の研究に、А. Г. Маргаян, К хронологии восстания возглавленного Иванэ Орбели, *Patma-Banasirakan Handes* (Yerevan), 1975, no. 4, pp. 146-153 がある。

(13) オルベリヤン家の当主タルサイチ (在位一二七二—一二八九年) のむすこで、スィウニク大 (府) 主教の位に登ったステパノス (一三〇四年没) は、一族と出身地の歴史『オルベリアン家とスィサカン地方の歴史 (Patmut'iwn tann Ōrbēleants' ew Nahangin Sisakan)』を著述した。この地方史の全体は七四章からなり、最初の第一章はこの地方の地誌、六五章までは古代より一三世紀までのスィウニクの王侯と教会の歴史、六六章より後の九章がオルベリヤン家の歴史に当てられている。この九章中、特にモンゴル人支配期に関する記述は著者と近親が目撃した、及び彼等自身の活動に係わっていて、史料として一次的価値を有する。ここでは主としてサンマルタンの仏対訳テキスト『オルベリヤン家史 (Patmut'iwn Ōrbēleants')』(Saint-Martin, II, 56-175 所収) を用い、シャフナザリヤンの刊本とペトカノフの露訳 (К. П. Патканов, *Исторія Монголовъ по армянскимъ источникамъ*, вып. I, С-Петербургъ, 1873, стр.

29-65) を参照した。

次にステパノスの年代記に記されたより以降の時代は碑文と写本奥付によらなければならない。一九世紀に様々な機会に集録されたアルメニア各地のアルメニア語碑文は、コスタネアンツによって集成刊行されている。また、近年の科学的網置的収集の成果は、S. G. Barkhudaryan, *Divan Hay Vimagrut'iwnneré* (『アルメニア碑文集成』) I-IV, Yerevan, 1960-69 に収められている。次にアルメニア語で、記憶、記念を意味するヒシャタカラン (Yishatakaran) と呼ばれる写本奥付は、その写本作製がなされた時の種々の事柄に触れ、歴史的諸事件の目撃を談る。ハチキャンは、この収集出版を続行中であるが (L. S. Khach'ikyan, *XIV Dari Hayeren Tserhagreri Yishatakaranner*, I-III, Yerewan, 1955-195)、サンジャンは、この中から特に史料的価値の高いと思うものを抜き出し、英訳した。本稿に用いたものはこの英訳史料集に収録されている。

なお拙稿「十三—十五世紀のアルメニア語史料」(『史朋』第六号) 参照。

第一章　スィウニクーオルベリャン家の動向

第一節　モンゴル軍のスィウニク征服とオルベリャン家の所領支配権

一二三六年、オルベリャン家の当主が、リパリトのむすこエリクムであった時、オゴタイによって西アジアに派遣されていたチョルマグン＝ノヤン麾下のモンゴル軍は、大アルメニア各地に侵入を開始した。[1] ステパノスは、一族がモンゴル軍に降服するに至った経緯を次のように述べる (Saint-Martin, II, 122)。

モンゴル (T'at'ar) 人が世界のこの地方に最初に来た時、我々の諸地方はアスラン＝ノヤン (Aslan Noin) の割当であった。エリクムは難攻不落の場所であるフラシカベルド (Hrashkaberd) に立籠った。アスランはこの城

の下に来て〔周囲〕を一巡し、占領は不可能であると知った。彼は城の正面に下馬し、彼〔エリクム〕に使者を遣わして、言った。この岩の上に留る方を好むのでなければ、我々と和し、来て我々に加われ。我々は神が支配権を与え賜ったこの国から立ち去ることは無いものと考えよ。汝は、汝と汝の一族の破滅を招くこの場所から出ることが望ましい。エリクムにはこの言葉に対し何の異議もなかった。それどころか、彼は丁重に返答し、〔身柄の安全を保証する〕誓約を要求すると、多くの贈物を持って彼のもとに行った。アスランは彼を見て強い好意を懐き、彼を迎え、彼と和し、自分の案内者の数に加えた。

アスランすなわちアルスラン（Arslan）[2]の名はアクネルのグリゴル（Grigor Aknerts'i）の年代記のアルメニアを分割した一三人のモンゴル人部将の中にも（Blake and Frye, p. 302）、『集史』「部族誌」「スニト部の項」[3]中のチョルマグン麾下の諸部将の中にも見出せないが[4]、エリクム降服の年次は、モンゴル人が最初に侵入した時、すなわち一二三六年である。アルスラン＝ノヤンはフラシカベルド城を陥れると、次いでこの地よりアニに至るまでの諸地方を征服し、この内ヴァヨツヴォルとエゲギスを彼に降って部下となっていたエリクムに与えた。ステパノスは、

エリクムは彼に完全な好意を表した後、騎乗し、その日より熱心にモンゴル人に仕えた。その結果、アスランが彼に与えた国々の所有はオルベリヤン一族に定まった。

と記す。エリクムはアルスランの平定戦に加わって功績をあげたのである。モンゴル人が逸早く投降してその近隣の平定に功あった者に、その現に有する所領を安堵したのみならず、他の者の所領をも与えたのは、アヴァグ・ザカリヤンの例にもあることである。[5] モンゴル人は征服地の諸侯に貢納の支払いとともに兵員の提供を求めた。チョルマグン＝ノヤンの行った軍事活動には、バグラト朝諸侯軍の占める役割が大であった。[6] ステパノスは年次を示さないで

(Saint-Martin, II, 124)、

数年後、そのモンゴル人将軍は、アヴァグ、シャハンシャフ(Shahanshah)と共にグルジア軍を引連れて行動を開始した。彼等は殉教者(Martiros)の町、すなわちネペルケルト(Nep'erkert)に進んだ。壕を設けて町を完全に包囲した後、一年数ケ月の間包囲を解かずに城壁の下に宿営した。この包囲の間に、エリクムは激痛を伴う病に冒された。これはアヴァグの命令によって彼の医師が毒を盛ったとさえ言われる。彼の遺体はノラヴァンク(Noravank')に運ばれた。

と述べる。「殉教者の町」すなわちマルティロポリス(Martiropolis)とは、中世のマヤーファーリキーン(Mayyāfāriqīn)、今日のトルコ領のディヤルバキル(Diyarbakir)地方スィルヴァン(Silvan)である。この町はフラグの西征によってモンゴル人に開かれたが、それ以前チョルマグン=ノヤンの軍隊が数次にわたってこの地方に遠征していた。イブヌルアスィール(Ibn al-Athir)は一二三一年モンゴル軍がこの地方を掠奪したことを述べ(d'Ohsson, III, 67)、マクリーズィー(al-Maqrīzī)は一二四一年モンゴル皇帝のイラン総督がこの町に使者を遣わして降服を勧告したことを記し(ibid., 85-86)、またヌワイリー(Nuwairī)は一二五二年に行われたモンゴル人のディヤルバクル地方各地の掠奪について述べる(ibid., 91-92)。アヴァグの名が挙げられているので、この包囲戦とエリクムの死亡はアヴァグが死亡した一二五〇年以前のことである。また、一九世紀の歴史家チャミチャン(M. Ch'amich'yan)は、一二四三年ルーム=セルジュク朝と戦ったバイジュ=ノヤンの軍隊中にはエリクムが加わっており、この会戦の後モンゴル軍はネペルケルトを包囲したが攻略には失敗した、と記す(Brosset, II, 519-520 n.)。

エリクムにむすこブルテルがあったことはステパノスも述べる(Saint-Martin, II, 146)が、アマガ(Amagha)の

一二六一年の碑文（Kostaneants', p. 103）に、

大リパリトのむすこエリクムのむすこ、私ブルテルは十字架を建立し（中略）私の母タムカ（T'amkay）は（以下欠文）

とある。ブルテルの母タムカは、ステパノスがマミコニャン家のグリゴル・マルツネアッィ（Grigor Martsneats'i）の娘としている者（Saint-Martin, II, 112）であろう。エリクムにはむすこブルテル、兄弟スムバト、イヴァネ、パフラダウラ（P'akhradawla）、タルサイチがあったが、ステパノスは彼の後継者について（Saint-Martin, II, 124）、

エリクムの兄弟スムバトは敬虔と徳とによって推薦に価したので、兄弟の死後、その支配権（ishkhanut'iwn）を取った。

と記す。スムバトは賢明、慎重で弁舌に秀いで、アルメニア、グルジア、ウィグル、ペルシャ、モンゴルの五語を難なく話した（Saint-Martin, II, 126）。

ステパノスは、エリクムの死後アヴァグの一族特に彼の妻ゴンツァはオルベリャン家に対して秘かな敵意を懐き、彼等一族を滅して所領を奪うことを計画し、スムバトに反乱を唆した（ibid., 128）、と記す。バグラト朝の諸侯は一二四九年実際にモンゴル人に対して反乱を企てている（Blake and Frye, p. 320, 322; Гадстян, стр. 26）。この誘いがことさらスムバトを陥れるために仕組まれたものであるとは考えられない。

さて、遇々そのころ、モンゴル人の捕虜となっていたスィウニクの小王（p'ok'r t'agawor）ダヴィト（Dawit'）[7]は、バイジュ＝ノヤンのもとから脱出し、逃亡の途中スムバトの家臣タンクレグル（T'ankrēghul）に遇い、彼に高価な宝石を与えた。スムバトはこれをバイジュに賜ろうとしたが、バイジュはこれをモンケに献上するように勧め、カラ

コルムまで部下を道案内につけた。スムバトはモンケに拝謁すると、アルメニアにおける教会堂の荒廃、オルベリャン家が失った所領、アルスランに対するエリクムの忠誠等について申し述べた。モンケは上奏が終ると、

スムバトをソルコクタニ＝ベキ（Surakhtʻambēk）という名の自分の母親に与え、彼を委ねて彼女に語った。「この者は我々が保護し、我々の何人にも委ねない我々のキリスト教徒です。」彼等は彼に ēnchʻu すなわち廷臣（tēr）の称号を与えた。

スムバトは三年間オルドに滞在した。帰国に当っては牌子と詔勅を与えられ、念願の所領問題については、彼はバイジュと彼の部将によって占領された国々の隣で、アスランの剣によって占領された総ての地方すなわちヴォロトンとその領域を与えた。ボロトン城をそこで殺された彼の父リパリトの血の代償[8]として租税をつけて、それに加えた。スムバトをグルジアと他のあらゆる租税台帳（dawtʻar）から除いた。スムバトは再び世襲地（hairenikʻ）を回復した。当初彼はそれを剣によって取ったが、アスラン＝ノヤンの権力のもとに奴僕のごとくであった。二度目は君主の下賜によったが、それはモンケに与えた高価な宝石の代価以外の何物でもなかった（Saint-Martin, II, 128-138）。

ステパノスはスムバト入朝の年次を一二五一年としている（Saint-Martin, II, 144）。モンケの即位は一二五一年一月或いは七月、ソルコクタニ＝ベキの死亡は一二五二年二月のことであった。スムバトはソルコクタニ＝ベキの「インジュー」（Per, injū）[9]となったが、ステパノスはそれを「テル」（tēr）と言い換える。すなわち王侯に従属する廷臣或いは家臣としてこの身分を理解したのである。これによって、スムバトの所領はソルコクタニの私領に属することとなり、公課の台帳から除かれたのである。

スムバトは帰国すると、安堵された世襲地の接収を容易にするため、バイジュ＝ノヤンの援助を求めた。モンゴル軍の武力を背景とした接収を終了させると、ただちにその領内で教会と修道院の修復と新設に着手した。ババヤンはこの時スムバトがアヴァグ家、プロシャン家、バチューティヤン家に属したいくつかの村落を併合したので、紛争が生じたとする（Бабаян, стр. 136-137）。しかし、近隣諸侯領の併合は、既にアルスランがエリクムに自己の占領地を与えた時に生じていたはずである。モンケの安堵はアルスランの採った方針の追認となっている。ステパノスが自家に対するアヴァグとゴンツァの敵意の理由について全く触れていないのは、かえってその間の事情を熟知していたからであろう。

スムバトの所領は、モンケによって安堵されたものであるにもかかわらず、オルベリヤン家の敵は、新たな攻撃を計画した。ステパノスは、スムバトに敵意を持つ諸侯が一二五四年トビリスィに集合し、おりから人口調査のためにここに来ていたアルグン＝アカのもとに赴き、オルベリヤン家攻撃の許可を求めた。[10] 攻撃までは許されなかったが、この請願は幾分効を奏し、スムバトは少なからぬ所領を失った。彼は再度入朝を決意し、アルスラン＝ノヤンの援助を求めた。こうして第二回目のカラコルム旅行が行われる（Saint-Martin, II, 140, 142）。

偶然時同じくして、アルグン＝アカは、ジャマールッディーン＝ハースハージェブ（Jamāl al-Dīn Ḥāṣṣ Ḥājib）を筆頭とする反対者の讒訴を被り、宮廷に召還された（Juvaini/Boyle, II, 521-523）。ステパノスはスムバトの今回の旅行の年次を一二五六年とし（Saint-Martin, II, 144）、ジュヴァイニーは一二五六年三—四月アルグンがホラサンのマルヴを通過したと記す（Juvaini/Boyle, II, 522）。スムバトがカラコルムについた時、アルグンは裁判をひかえて拘留されていた。ステパノスはアルグン攻撃の主謀者がシャラパディン（Sharap'adin ; Per. Sharaf al-Dīn）とセヴ

ィンチ＝ベク（Sevinch Bēk）であり、セヴィンチ＝ベクはスムバトにとっても敵であったと記す（Saint-Martin, II, 142）が、ジュヴァイニーはこの二名については触れない。

モンケはスムバトに所領と現地のモンゴル軍の状態について尋ね、次にアルグンが諸国を荒廃させ、僧侶を殺害したか否かを質問した。スムバトはアルグンが全く正しいことを証言した。その翌日裁判が行われたが、誣告者シャラフッディーン、セヴィンチ＝ベクの有罪が確定し、疑惑の晴れたアルグンは放免された。一方、スムバトの用件についてモンケは、

彼をアルグンに紹介し、最初のものよりも一層確実にスムバトの財産の所有権を保証する新しい勅書を発行するように命じた。

このようにしてオルベリャン家の所領は先回の勅書どおりに安堵された。スムバトはアルグンと共に帰国の途についた（Saint-Martin, II, 142）。アルグンは一二五八年九月ホラサンに帰任している（Juvaini/Boyle, II, 523）のであるから、スムバトもこのころ領地に帰ったであろう。

第二節　イル＝ハンとオルベリャン家

スムバトが二度目のカラコルム旅行から帰国したころ、フラグはイスマーイール派とアッバース朝に対する作戦を成功裏に終了させていた。ステパノスは（Saint-Martin, II, 144）、

彼はフラグにも恩寵を被ること厚く、栄誉を授けられた。また彼自身の用事を命じられた。

と記す。スムバトに寄せるフラグの信頼は絶大で、彼は望む者の生死を決することができる程であったので、万人が

彼を恐れ、彼に注目していた、という（ibid., 154, 156）。スムバトはアラターグに造営されたフラグの夏の宮殿に用いた木材を大アルメニアのアイララト（Ayrarat）州バセン（Basēn）で伐採した（ibid., 144）。間もなく、グルジア王ダヴィティ五世の反乱が起ったが、他の諸侯の多くと同じくこれに加わらず（Brosset, I, 556-557）、かえって、アヴァグの寡婦で、王と再婚していたゴンツァをフラグの命令によって処刑した（Saint-Martin, II, 150）。[11] これに続いて、フラグとキプチャク＝ハン国主ベルケとの間に戦争が起り、スムバトの甥ブルテルは従軍して一二六三年テレク河付近で戦死している（ibid., 146）。このころより死亡する年までのスムバトの活動は知れない。アルグン＝アカと財務長官シャムスッディーンに会見するためにイル＝ハン国の首都タブリーズに赴き、その地で病死したのである（Saint-Martin, II, 152）が、その年次については主教ステパノス（ステパノス・オルベリャンとは別人）の年代記アルメニア暦七二一（西暦一二七二）年の項（Hakobian, II, 45）に、

グルジア王座にディミトレ（Dimitre）が即いた。同年、偉大で高名なスムバトが死亡した。

とあり、ステパノス・オルベリャンも、タルサイチがスムバトの死亡した後、一二七二年ディミトリを王位に即けた、と記す（Saint-Martin, II, 160）。一二七二年が没年であろう。一方、ステパノスが（ibid., 152）、

一二七三年、タルサイチは兄のために聖グリゴル（Grigor）に捧げる教会堂と共に墓を建立した。

と述べ、ノラヴァンク（Nora Vank‘）に残る一二七三年の碑文（Kostaneants‘, p. 116）にも

王（ark‘ay）スムバトはこの墓所に休む。我々は記憶する。〔アルメニア暦〕七二二年。

とある。スムバトの遺体はタブリーズよりヴァヨツヅォルに運ばれ、死亡の翌年一二七三年碑銘の残る墓に埋葬されたのである。

スムバトは男子を持たなかったので、一番下の弟タルサイチを養子としており、彼が兄より統治権を引き継ぐことは、アルグン＝アカとシャムスッディーンによって、あらかじめ承認されていた（Saint-Martin, II, 152）。タルサイチもまたイル＝ハンの好遇を得た。アバガの賞讃を賜って、度々高価な栄服を授けられた。また、ホラサン、シリア、小アジア、アマスィア、ハマ、ダルバンド等の戦役に合せて九度出征し、武勇の程を示したので、ハンより勝利を記念する金牌を拝領した。（ibid., 158, 160）彼はスムバトと同じく多くの修道院、教会堂を建立修復し、ゴシャヴァンク（Goshay Vank'）修道院、タテフ（Tat'ew）修道院に所領の寄進を行った（ibid., 146, 148, 160）。

タルサイチが所領を継承したイル＝ハンのアバガ統治年間は、サドゥン・アルツルニの権勢が盛んであった。タルサイチは、ディミトリの即位に功績あったようであるが、それにもかかわらず、直ちにグルジア国政において重要な地位を占めなかった。しかし、アバガ、サドゥンが相次いで死亡すると（一二八二年）、タルサイチの地位が上昇した。主教ステパノスの年代記（Hakobian, I, 41）には、イル・ハン＝アフマドについて、

彼はスムバト王（ark'ay）の弟で、王を思わせる偉大なアルメニアの諸侯タルサイチを司令官（hramantar）、大総督（mets gortsakal）に任命した。

とある。タルサイチは、アフマドよりフラマンタル、メツ＝ゴルツァカルの二つの地位を与えられている。この内、後者は彼の墓碑銘（Kostaneants', p. 131）にも見える職名であるが、両者共に内容は知れない。

アフマドに対するアルグン派のクーデターが成功した時（一二八四年）、タルサイチはグルジア王共々アルグン側に付いており、ステパノスによると（Saint-Martin, II, 164）、

アルグンに愛され、栄誉を与えられた。

のである。タルサイチはグルジア王ディミトリからは、アニ、カルス、トビリスィの間の諸地方の統治権とアタベギ職を得るが、数年後死亡する。

ステパノスはタルサイチの死について（Saint-Martin, II, 170）、

キリスト紀元一二九〇年敬虔なる諸侯中の諸侯タルサイチは人生の限りに達し、アルパ（Arp'a）の宮殿で死亡した。

と記し、一二九〇年を没年としている。またアルメニア暦七三八年（一二八九年一月八日―一二九〇年一月七日）の年次を刻む墓碑に（Kostaneants', p. 131）、

七三八年。これは王の如き統治者（ark'ayshuk' kogmnakal）、偉大なる大総督（mets goltsakal）、勇敢で戦闘に断固たるアタバク（at'abak）＝タルサイチの休み所である。

とある。没年は一二九〇年、墓所建立が一二九一年であろう。

タルサイチは二度結婚し、最初の妻アルズ（Aruz）との間にエリクムとステパノス、二番目の妻ミナ（Mina）との間にパフラドラ（P'akhradōla）とジャラル（Jalal）合わせて四名の男子を持った（Saint-Martin, II, 146, 160）。ババヤン（Бабаян, стр. 181）は彼の死後長子エリクムと一二六〇年ごろ死亡した兄弟イヴァネのむすこリパリトの間に所領相続の争いが生じたものとする。これについて、エリクムの弟であるステパノスは（Saint-Martin, II, 170）、

彼の死後、むすこ達は領地（tērut'iwn）[12]と統治権（ishkhanut'iwn）の継承のために分れ〔て争っ〕た。彼等は君主の宮廷に行き、世界の主人アルグン＝ハンの前で〔拝謁の〕目的を上奏した。彼は先ず、エリクムと呼ばれる最年長者の前に行き、彼を父の地位につけ、全〔兄弟〕の長（iskhan）とした。

と述べ、リパリトは問題とされていない。継承権の争いはタルサイチのむすこ達の間に生じたのである。ステパノス

は続けて、

しかしながらエリクムは父の全世襲地を受け継いだにもかかわらず、兄弟に対して損害を与えまいと望み、所有する全部の物を、主教、主祭、貴顕（azat'ōk'）の間に分配し、しかる後に、正義に従って一部を兄弟ジャラルに与え、他の一部を父方の従兄弟リパリトに与えた。こうして〔一族の〕団結を保持し、偉大、厳粛な統治（ishkhanut'iwn）によって、この国の領地（tērut'iwn）を治めた。

と記す。エリクムは異母弟ジャラル、従兄弟リパリトと世襲領を三分し、全体の統治権は保持したのである。

エリクムの弟達の内、スィウニク地方史を著したステパノスは、一二八〇年父タルサイチの招いた多くの主教、博士、僧侶の援助によってノラヴァンクで聖職に叙された。後に、キリキアに赴き、アルメニア教会の教主であるカトリコスのコスタンディン二世（Kostandin II Prongordzn, 在位一二八八—一二九〇年）によって、ヴァヨツヅォル地方とタテフ地方の多くの主教の上位者であるスィウニクの府（或いは大）主教に叙任された。ステパノスはカトリコスの叙任状をもって帰国したが、タテフの主教ハイラペット（Hayrapet）とホヴハネス（Yovhannēs）はこの人事に強く反対した。ステパノスはアルグン＝ハンのもとに赴いてカトリコスの叙任状を提示して支持を求めた。アルグンはステパノスに「全教会、領域（ashharh）、主教」に対する支配権を確認する勅書を与え、廷臣を伴わせてタテフに帰した（Saint-Martin, II, 166, 168）。これは諸侯としてスィウニク地方の統治権を有するオルベリャン家の一員が管区内の主教に対する裁治権を有する府主教位に即き、これによって同家は聖俗両面でこの地方の支配権を把握したことを意味する。彼は死後この地位は兄弟の子孫ホヴハネス（在位一三〇四—不明。一三一〇年には位にある。）、ステパノス（一三二一年には位にある。）、ホヴハネス・ヴォロタネッィ（Vorotanets'i 一三八六年没。）、ステパノ

ス・イヴァネ（一四一七年には位にある。）に受け継がれ、事実上オルベリャン家の私有するところとなった。

エリクムの従兄弟リパリトには長子スムバト以下五子があった（Saint-Martin, II, 174）。一三一七年ヘルヘル（Herher）の寄進碑文（Kostaneants', p. 158）には、スムバトがエジプト軍の捕虜となったが後に解放されたと記されている。イル＝ハンのシリア遠征軍に加わっていたのであろう。彼には妻ヴォフトグ（Vokht'og）との間にタンツァタグ（Tantsat'agh）の領主（tēr）であったむすこベナ（Bena）があった。リパリトの次子ホヴハネスはステパノスの力によって聖職に入って高い地位を得、一三〇四年にはスィウニク大主教の位に登った（Saint-Martin, II, 174）。

エリクムの異母弟ジャラルの家族については、一三二六年のヴァガディン（Vaghadin）の碑文に（Kostaneants', p. 163）、

ジャラルのむすこである私ステパノス・オルベリャン、スィサカン地方の大主教は、自分の家であるヴァガディンヴァンクに行き……。

とある。このステパノスがホヴァネスを継いでスィウニク大主教に就任した者である。

ババヤンはエリクムの没年を一三〇〇年とした（Бабаян, 182）。この年のノラヴァンク碑文（Kostaneants', p. 141）は追悼のためのものであろう。彼は妻タムタ（T'amt'ay）と間にブルテル、ブグダおよび一女をもうけた（Saint-Martin, II, 174）。ババヤン（Бабаян, стр. 183）は彼がグルジア王国のアミルスパサラリ、スィウニクートゥマン[13]の支配者であり、諸侯中の諸侯（ishkhants' ishkhan）、大グラフ（graf）を称した、とする。

オルベリャン家の所領支配はスムバト（?—一二七二年）の後、タルサイチ（一二七二—一二九〇年）、エリクム（一二九〇—一三〇〇年）の順に継承された。彼等の相続に際して、イル＝ハン側の承認、選任が行われた。タルサ

イチはアフマド＝ハンにフラマンタル、メツ＝ゴルツァカルの二官職を与えられ、ステパノスはアルグン＝ハンに大主教就任の保証を得た。オルベリャン家は自己の保有する支配権の最も根本にかかわる問題についてイル＝ハン或いはその最高級官人と密接に関係し、他の在地的権力の介在を許していない。イル＝ハン国に通常に見られる土着君主とイル＝ハンとの関係に同じものが観察されるのである。

第二節　一四―一五世紀初頭の所領支配権の継承の系譜

一三四五年ヘルヘルの碑文(Kostaneants', p. 164)に、

大パロン＝ブルテル（Paron Purtʿēl）と彼のむすこベシュケン（Pēshkʿīn）、イヴァネの統治年間に……。

とあり、

一三四八年ヴァヨツヴォルのヘルモン（Hermon）修道院で筆写された写本奥付（Sanjian, p. 86）に、

スィウニク州の（中略）故パロン＝ブルテルのむすこ達、諸侯中の諸侯ベシュケンと兄弟イヴァネの君臨と統治の期間。

とある。支配権を得ていたブルテルは、[14] 一三四五～一三四八年の間に死亡し、支配権はむすこベシュケン（Beshkʿēn）が継承した。ブルテルにはこの両者の他に男子サメグ（Samegh）があった（Kostaneants', p. 167）。イヴァネにはブルテル、スムバト、グルゲン（Gurgen）、ホヴハネスの諸子があった（Sanjian, p. 102, 143; Nève, p. 77）。チムールの遠征軍にタテフを追われ、避難の途中死亡したスィウニク大主教ホヴハネス・ヴォロタネツィ（一三一五―一三八六年）は、イヴァネのむすこである（Sanjian, p. 102; C. F., Mécérian, p. 290）。

一四一九年ヘルモン修道院で記された奥付に（Sanjian, p. 143）、

この州のバロン＝スムバトのむすこバロン＝ベシュケンの兄弟であるテル＝ステパノス＝イヴァネの在位期間に……。

とある。イヴァネのむすこ達の中でスムバトが所領支配権を継ぎ、彼にはベシュケン（二世）、ステパノス＝イヴァネの二子があって夫々聖俗の各権を把握したのである。

ババヤンは、イヴァネの父ベシュケン（一世）の地位は後にオルベリャン一族のチェサル（Ch'esar）に替わられた、と述べる（Бабаян, стр. 183）。早くも、一三四九年シャティヴァンク（Shativank'）の碑文（Kostaneants', p. 169）にティリ・カングネツィ（Tiri Kangnets'i）なる者は、

パロン＝チェサルの統治年間に……

と記しており、一方同年エレラン（Ereran）修道院で筆写された写本奥付（Sanjian, p. 87）に、

勇敢なるアルメニアの部将、敬神敬虔なる諸侯中の諸侯ベシュケンとイヴァネの統治年間に……

とある。ベシュケン一世とチェサルの交替はこの一三四九年に行われたものであろうか。このチェサルについて、一三三二年のセリム（Selim）の隊商宿（Karawanatun）の碑文（Kostaneants', p. 165）に、

七八一（西暦一三三二）年。アブーサイド＝ハンの世界支配の時。諸侯中の諸侯スムバトと母アマ（Amay）のむすこ、イヴァネの孫、オルベリャン一族の私チェサルと我が兄弟、獅子の如き諸侯達ブルテル、スムバト、エリクム……

とある。ところがウルババヤン（Ulubabayan, p. 325）は、『アルメニア碑文集成』収集の同一碑文に拠って、チェサ

ルをイヴァネの孫、リパリトのむすこであると記す。引用文の「スムバト」は「リパリト」の誤写であるとしているのである。さて、先に引用した一三一七年ヘルヘルの碑文（Kostaneants‘, p. 158）では、スムバトの妻はヴォフトグ、むすこはベナであると記され、ここに引用したものとは一致しない。次に、セリムの碑文ではチェサルの父のみならず兄弟にもスムバトの名が見え不自然である。ステパノス（Saint-Martin, II, 174）はリパリトのむすこの数を五名とするが、先に述べたスムバト、ホヴハネスにここに見えるチェサル、ブルテル、（スムバト）、エリクムを加えると丁度五名になる。また、イヴァネ－スムバト－チェサルと続く三世代の系譜は他の史料には見えない。すなわち、チェサルの父はスムバトでなくリパリトであろう。チェサルは妻ドピヤン（Dop‘ean）家のホリシャフ（Khorishah）との間にサルギス（Sargis）、ホヴハネス、クルド（K‘urd）、ヴァルダン（Vardan）の四子をもうけた（Kostaneants‘, p. 165）。

さて、セリムの碑文においてチェサルは父親リパリトを「諸侯中の諸侯」の称号で呼んでいる。しかし、ステパノスの記すところに拠ると（Saint-Martin, II, 170）タルサイチの死後一族の長となったのはエリクムであって、リパリトではなかった。従って、このような称号にもかかわらず全所領の支配権を享受したのではない。次に、チェサルは父を「諸侯中の諸侯」と呼ぶのみならず、兄弟を「諸侯達」と称している。家長たる父親を「諸侯中の諸侯」、むすこ達を「諸侯」とする関係の存することが指摘されるのである。このような関係はリパリトの家族のみに限られるのではない。一三一五年のヴァガディン修道院の碑文（Kostaneants‘, p. 175）に、エリクム三世の子供達は、

我々、ブルテレとブグタ、スムバトの兄弟タルサイチのむすこエリクムのむすこ達、スィサク（Sisak）の子孫の諸侯達

と記す。また、エリクムのむすこブルテルの家族についても、アヴァグなる者が記した一三四四年ノラトゥス(Noratus)の碑文(Kostaneants', p. 167)に、

ブルテルと申子達である諸侯達ベシケン、イヴァネ、サメガの統治(paronut'iwn)の時に……

とある。兄弟達が同時に諸侯(ishkhan)と呼ばれているのである。後者の場合、三人の兄弟の文法上の格は属格であって、「統治」にかかっている。このように父子、兄弟からなる複数者の名を同時に支配者として記すことは、一四世紀の写本奥付と碑文に広く見られる。先述のヘルヘルの碑文(Kostaneants', p. 164)、一三四八年ヘルモン修道院の写本奥付(Sanjian, p. 86)、一三四九年のエレラン修道院の写本奥付(ibid., p. 87)に見えるとおりである。このような例は他にも管見の限り、一三〇六年エゲギスの写本奥付(Sanjian, p. 51)に、

この州における敬虔かつ最も祝福された諸侯達ブルテルとブグダの統治年間。

とあり、一三一〇年ヴァヨツヅォルのヤラテス修道院で記された写本奥付(Sanjian, p. 56)にも、

この地方におけるパロン=ブルテル、パロン=ブグダ兄弟、及びパロン=チャサイル(Ch'aysar=Ch'esar)の支配年間。

とある。すなわち、一四世紀にオルベリヤン家では所領の一族共治、或いは分割統治の傾向が現われているのである。チェサルは所領全体の統治権を得たのではない。一族の名が単独で見えるか、複数となるかは、碑文の文書或いは記念碑としての性格によろう。

一三八四―一三八五年にキプチャク・ハン=トフタミシュのイラン侵入があってスィウニク地方は多大の損害を被ったが、ブルテルの孫、イヴァネのむすこ達、ヴォロトンのスムバト、ヴァヨツヅォルのグルゲンの支配権に変動はなかった(H. Zh., pp. 22-23)。しかし、一三八六年僧ハコブ(Yakob)は(Sanjian, p. 102)エルンジャクにおいて、

我々の数多くの罪によって、異教徒の一団がキリスト教徒、特にブルテルの領地に〔現れた〕。彼等は来寇して、ヴォロトン城を占領しナニク（Nanik イヴァネ）の子スムバトから父祖の領地を奪った。

と記し、ある無名の年代記作者は（Гапстян, стр., 88）、

トルコ人がヴォロタンの要塞を占領した。大ヴァルダペト＝カヒク（Кахик）はツァル（Цар）に逃げた。一方、パロン＝グルゲンは心痛から死亡した。

とある。トルコマン人はヅグク地方を占領した。グルゲンは死亡したがこの時ヴァヨツヅォルは安泰であった。

この同年、チムールの軍隊が北西イランに到着し、ジャライル朝、グルジア王国、シルヴァン、トルコマン諸部族に対する作戦を実施し（H. Zh. p., pp. 23-32）、大アルメニアの諸侯にも深刻な衝激を与えた。トマ・メツォペツイ（Towma Mets'opets'i）は（Nève, p. 77）、

統治の最初の年、オマル（'Umar Mirzā）は荒れた葡萄園の葡萄蔓の最後の葡萄の房のように、全民族に残されていた我が種族の三人の諸侯を虐待し、棄教を強いた。彼等〔の一人は〕オルベリャン家に属し、ブルテルの孫、イヴァネのむすこで、スィウニク地方ヴォロトンの領主ブルテルであった。彼の兄弟スンパドは家族と共にサマルカンドに連行されたが、神の憐憫と彼等の祈りに対する恩恵によって、後に生国に帰された。同じく、コルコン（Korkon）或いはゴルゴンのむすこでエゲゲアツの領主タルサイチに改宗を強いた。

と述べる。チムールの孫オマル＝ミルザの統治の最初の年とはヘジラ暦八〇七年、西暦一四〇四／五年である。この年までスムバトと兄弟ブルテルとがヴォロトンに、グルゲンの子タルサイチがヴァヨツヅォルに健在であったのである。チムール朝は、マク（Per., Mākū）の領主ヌールッディーン、グルジア・カルトリ（Kartli）地方のジャニベク

(Per., Jānī Bīk)、サムツヘ＝アダベギ領(Samtskhe-Saatabago)のアクブカ(Aq Būqā)等の場合と同じく、オルベリヤン一族を従え、その所領を安領を安堵したが、彼等にムスリムになるよう強制したのである。ところが、やがてチムール朝の威光が陰り、アルメニアの国力が回復すると、トマは(Nève, p. 95)、

チャガタイ人の時代に棄教を強いられた人々、ヴォロトンのブルテル、エゲゲアツのタルサイチ、マクのソルガトミチ(Sorghatmitch)、アグツフ(Aghtzkh)のアギタン(Aghitan)は再び信仰に帰った。

と記す。従ってババヤン(Бабаян, стр. 183)の見解とは異って、チムールの遠征がオリベリヤン家のスィウニク支配の終焉をもたらしたのではなかった。

スィウニク地方とオルベリヤン家にとって最大のしかも決定的な災厄は一五世紀一〇年代に起った。一四一二年の日付のあるグルジア・アハルツィヘ(Akhaltzikhe)で記された写本奥付(Sanjian, p. 135)には、

我々の地域のパロン＝スムバトと彼のむすこパロン＝ベシュケンの統治する間に。彼等は悪しき者〔サタン〕の差金に拠って父祖伝来の所領から追放された。

とあり、一四一七年の奥付に、

ブルテル家の子孫スムバトはグルジアに追げ、そこで客死した。命を存えている彼のむすこ達は父祖伝来の所領に帰ったが、彼等は自己の領邦の主人ではなく、むしろ無法な者どもの従者であった。

とある。ヴォロトンの城主であったスムバトは一四一二年以前に所領を追われグルジアに亡命してその地で客死し、彼のむすこ達は故国に帰ったが、従前の所領支配権は認められなかったのである。また、ヴァヨツヴォルのタルサイチの支配権について一四一九年エゲゲツのヘルモン修道院で記された奥付(Sänjian, p. 143)には、

我々の地方のブルテルのむすこイナニクのむすこグルゲンのむすこパロン＝タルサイチの〔支配する時〕、今年、彼〔タルサイチ―サンジャン〕は多くの苦悩困窮を味わった。一時は一地方全体を統治した彼が、今や一片の農地、ただの一個村も統治していないのである。何故ならば彼等は、彼の村々、町々、修道院、聖所を押収し、もぎ取ったのである。彼は逃げて、主なる神が彼に以前の栄光と権威とを回復し賜うまでと、岩の裂けめ、木立に隠れた。

と記される。ヴァヨツヅォルのタルサイチは完全に所領支配権を失ったのである。写字生が写本奥付に記し残した「彼等」、「無法な者供」とは、カラコユンル部のトルコマン族に他ならぬ。かくして、一四一〇年代にオルベリャン家はヴァヨツヅォルとヴォロトンの所領を失い、北西イラン或いはザカフカース政治史の舞台から退くのである。オルベリャン家のみならず、同じ時期に、アンベルトのバチュチャン家、マクのヌールッディンの子孫等、多くのアルメニア人諸侯がカラコユンル部のために所領を失った。北西イランのトルコ化が開始されたのである。

オルベリャン家当主の地位はエリクム（二世）の没後、一四世紀に、ブルテル（一三〇〇年―四〇年代末）―ベシケン（四〇年代末―八〇年代には既に死亡）が継承した。ベシケンの後、所領支配権は分割され、ヅグクを彼の兄弟イヴァネの子スムバト、その子ベシュケン（二世）が継承し、ヴァヨツヅォルをイヴァネの子グルゲン、その子タルサイチが継承した。

一四世紀には所領支配権の分割或いは一族共治の傾向が生じた。碑文、写本奥付には父子、兄弟の名が支配者として同時に書き連ねられている。彼等は、その内の一人がイシハンツ＝イシハンと呼ばれる場合を除き、イシハン、パロンと呼ばれた。この傾向は最後に所領支配権そのものが二分されるまでに至ったのである。

註

(1) d'Ohsson, III, 75–78; Altunian, S. 29–37; Галстян, стр. 5–21; его же, Завоевание Армении Монгольскими воисками, *Татаро-Монголы в Азии и Европе*, Москва, 1970, стр. 158–177.

(2) ステベノスがエルデイグズ朝の "Qizl Arslan" を "Khzl Aslan" と記している (Saint-Martin, II, 102) のをはその一例である。

(3) А. А. Ализаде, сост., Ращид ад-дин; Джāми'ат-тавāрих том I, часты 1, изд.-2е, Москва, 1968, стр. 150–158.

(4) チンギス＝ハンのアフガニスタン遠征軍中にアミール＝アルスラーン (Amīr Arslān) という部将がいた。オゴタイ＝カガンはこの者をチョルマグン＝ノヤンのもとへ派遣した (Muḥammad Zubayr aṣ-Ṣiddiri, ed., *Ta'rikh Nama-i-Harát of Sayf ibn Muḥammad ibn Ya'qúb al-Harawí*, Calcutta, 1944, rep., Tehrān, 1973, ṣ. 126)。ただし、イスファザーリーは同じことを述べて、アルスランの派遣先をチョルマグンのもとではなくホラサンであると記す。(Saiyed Muhammad Imám, ed., *Rauzát-al Jannat fí Owsáf-e Madinat-e Herât by Mn'in-nod Din Muhammad Zamchi Esfezári*, Teheran, 1955, part ii, p. 118)

(5) Dulaurier, pp. 235–236.

(6) グリゴル (Blake and Frye, p. 301, 313, 321) は、グルジア人アルメニア人諸侯はモンゴル人に貢納 (mal) と軍役 (khalan) を負ったと記す。(海老沢哲雄「キリキア＝アルメニア王国とモンゴル帝国」『埼玉大学紀要』教育学部第一五巻、Бабаян, стр. 249–251 参照)。

(7) ベトカノフ (Патканов, стр. 36, 83–84) この部分を "давид (а), царьк (а) сонского スヴァン人の小王ダヴィドを" と解し、彼はルスダン女王のむすこダヴィティ＝ナリン以外の誰かであろう、とする。ベベヤン (Бабаян, стр. 133) は「スヴァン人の小王」と訳す、ダヴィティ＝ナリンと解した。シャフナザリヤンのテキストは「Sonk' の小王 Dawit'」とし、注に「ソンク」をスヴァネチア、「ダヴィト」をグルジア王ダヴィティ＝ナリンであると記す (Shahnazarean, II, 152, 343–346)。しかし、ダヴィティはタンクングルに宝石を与える際に、「もし、私が自分の宮殿に戻り、〔再び〕統治することになったら、これを私のもとに持参しなさい。汝が望む限りの領地と町を与えよう。もし、そうならなかったら、私はスイウニクを去り、それは汝のものとなろう」と語った (Saint-Martin, II, 131)。ここで問題となっているのはスヴァネチアでなく、スイウニクである。また、グルジア王は、しばしばアブハズイアの王とは呼ばれ

るが、スヴァネチアの王とは呼ばれない。更にグルジア王には、ダヴィティ四世ナリンであれ、五世ラシャであれここに記されているような事情にあったことはない。従ってこのダヴィティはグルジア王ではない。古代のスィウニク王家の子孫であろう。

(8) リバリトはボロトン城に面した山上で暗殺者の放った矢で負傷し、そのためにコロショト＝ヴァンク城（Koloshot Vank'）で死亡した Saint-Martin, II, 113)。「血の代償」とはこれを指すものであろう。

(9) アルメニアに設置されたインジューについては、Бабаян. стр. 224-226 参照。また、インジューについて慶応義塾大学大学院白岩一彦氏に多々御教えいただいた。

(10) キラコス・ガンヅァケッツィ（Kirakos Gandzakets'i）と主教ステパノスはアルグン＝アカの人口調査をアルメニア暦七〇三年（一二五四年一月一七日―一二五五年一月一六日）としている（Dulaurier, p. 461; Гаджян. стр. 35)。

(11) ソルコクタニ＝ベキが一二五二年に死亡すると彼女に属するでビチクチあったスィラージュッディーン（Sirāj al-Dīn）はアリクブカに従属することとなり、一二五三年その地位を確認する勅書と牌子が発行された（Juvainī/Boyle, II, 519)。従って彼女の全インジューがアリクブカに与えられたものと考えられよう。しかし、ステパノスの記述では、オルベリヤン家がフラグにのみ従属していたように理解される。

(12) ステパノスは、インジューをテルとアルメニア語訳している。従ってテルーチューン（tērut'iwn）はインジューたる身分を言うものであるかもしれない。

(13) オルベリヤン家領もしくはスィウニク地方がイル＝ハン国のトゥマンを形成したという論拠は示されていない。

(14) ブルテルの子孫の系譜に関する研究に L. Khach'ikiyan, Syunyats' Ōrbelyanneri Burt'elyan Chyughe（『スィウニクのオルベリヤン一族のブルテリヤン支家』）、*Banber Matenadaranu*, No. 9 があるが未見である。

(15) 所領を追われたベシケンはグルジアの宮廷に避れた。一四一〇―一一年副王アレクサンドレ（Alek'sandre）は、彼の娘ドゥランドゥフト（Dulandukht）を娶り即位（在位一四一二―一四四二年）後は彼にロリ地方を与えた。しかし、王はベシケンの勢力強大化を恐れ、一四三七―八年彼を毒殺した（Toumanoff, p. 178; Nève, pp. 144-145)。トゥマノフはベシュケンを所領から追ったのはチムール朝のシャールフであるとするが、ホヴァネスィヤン（Yovhannēsean, p. 470）は、ベシケンのグルジア亡命の原因を一四〇七年のカラコユン部カラユスフの侵入であるとする。

カラユスフは一四〇七年チムール朝のミーランシャー、アブーバクルを破ってアーザルバーイジャーンを取り、一四二

○年チムールの子シャールフ軍を迎え打つウージャーンの陣中で没した。(E. G. Brown, *Literary History of Persia*, vol. III, Cambridge, 1964, pp. 399-400; C. L. Huart, "Kara-Koyunlı," *Encyclopedia of Islam*, Old Edition, 1913, London and Leiden; F. Sümer, *Kara Koyunlılar*, Ankara, 1967, pp. 72-112; İ. Uzunçarşili, *Anadolu Beylikleri ve Akkoyunlu, Karakoyunlu Devletleri*, Ankara, 1969, pp. 181-183 参照。) カラユスフとするのが正しいであろう。

第二章　所領[1]の形成と分布

第一章　第一節　新所領の境界

モンゴル人支配下におけるオルベリヤン家の所領形成は、モンゴル人の北西イラン征服支配の方法と直接の関係を有する。

アルスラン＝ノヤンの攻撃に抵抗して、エリクムが籠城した要塞はフラシカベルド城であったが、彼の父リパリトがヴァヨツヅォルのノラヴァンク修道院に建てた一二二一年の石碑（Minorsky, p. 876）に、

彼〔エリクム〕のむすこリパリトは非常に齢若くして聖グレゴリウスの教条に復帰し、アタベク＝イヴァネのもとに出頭した。彼は私に世襲地の代償としてフラシカベルドとその付属地を与えた。

とあり、翌一二二二年のヅォルトハルブ（Dzorutkharb）の碑文（Kostaneants', p. 66）に、

アタバク（Arm., at'abak）＝イヴァネは、リパリトに世襲領地の代わりとして、フラシカベルドとその地方、またヴァヨツヅォル、ゲガルクニ、コタスン（Kotaysn）、カイェン（Kayen）に多くの村々を与えた。（中略）私

はここに留り、トハルブ（Tkharb）を全付属地と共に、またハムサリ（Hamsari）村の一地区を受領した。

と記されている。次に、これらの碑文を史料として利用したと思われるステパノスの年代記（Saint-Martin, II, 110）に、イヴァネはリパリトに対して、

王の勅命によって、世襲地の代償としてフラシカベルドとその地域を、同じくヴァヨツヅォルの多くの地域を、コタスンのエラルン（Ēlarhn）と他の地域を、ゲガルクニのハムサリと他の多くの場所を、及びカイェアン（Kayean）のアガステフ（Aghastew）とそこの収入を与えた。彼が第一番にスィウニクと他の城々に入ったので、彼にスィウニクとヴォロトンとバルクシャト（Barkushat）の城々を与えた。ラシャ（Lashay）王〔グルジア王ギオルギ＝ラシャ〕とアタバク＝イヴァネはリパリトをこの地方の知事（Koghmnakal）に任命した。

とある。すなわち、モンゴル人侵入前のオルベリャン家領は、世襲地オルベト地方の代償として、フラシカベルドを始めとするヴァヨツヅォルの村々、コタスンのエラルンと他の村々、ゲガルクニのハムサリと他の村々、グガルク（Gugark）州カイェン地方のアガステフ等からなり、後にグルジア王国軍のスィウニク州東部占領の際の戦功によって、スィウニク、ヴォロトン、バルクシャト三城を加えられ、更にこの地域の知事に任命された。

しかし、イヴァネは、リパリトの知事任命と同時に（Saint-Martin, II, 110）、

ヴァヨツヅォル州における知事に、敬虔なる諸侯ブロシ（Brhosh）の父で、万人に尊敬されたヴァサク・ハチェネツィ（Vasak Khach'enets'i）を置いた。

のである。リパリトの所領はスィウニク州の東西に分散し、本拠フラシカベルド城のあったヴァヨツヅォルは別の諸侯ヴァサクの知事管区とされたのである。アタベギ（アタバク、アタベク）＝イヴァネは諸侯領分散政策を採ってい

たのであろう。

一二三六年、アルスラン＝ノヤンは征服地をエリクムに与え、「アスランが彼に与えた国々の所有は、オルベリャン一族に定まった」のであるが、ステパノス（Saint-Martin, II, 124）に拠ると、アルスランは、

ヴァヨツヅォルとガルニ（Garhni）に面したエレロン（Ereron）までのエゲギク（Eghegis）地方を征服し、全部をエリクムに与えて、言った。「剣によって征服したものは、金を払って手に入れた物と同じく適法な財産である。我が剣が従えたこれらの国は汝の一族の世襲財産である。」

アルスランはアルパチャイ（Arpachay）河流域のエゲギス或いはエゲギクからガルニ或いはアザト（Azat）河に至る全地域をエリクムに与えたのであるが、明らかにこれは現に所有した所領の安堵ではなく、アルスランは自己の征服地を新にエリクムに与えたのである。モンゴル人の侵入前アルパチャイよりガルニ河に至る地域には、ハグバキャン―プロシャン、マミコニャン、ザカリャン等の所領が存在していた（Бабаян, стр. 26）。従って、エリクムがこの地域を領有することになれば、これら諸侯の権利は損われる。アルスランが武力征服の正当性を主張するのは、このような事情があったからである。

次に、モンケの勅書は、アルスランが与えた地域の中には挙げられていないヴォロトン地方の領有を認めるものであった。スムバトは帰国後バイジュの武力を借りて、この地方を接収した。ステパノス（Saint-Martin, II, 138）はスムバトが、

ボロトンとブゲンの境界に至るヴォロトンの領域全体を領有した。その中にはスィウニクの主教座教会タテフがあり、その当時は荒廃していた。

と述べる。続いてヴァヨツヅォル方面については（ibid., 138）、

彼は更に、エゲギス、ヴァヨツヅォル、ポシャハン（P'oshahan）、ウルツ、ヴェテ（Vetē）の全域をそれが付属する谷と共に、エレルン（Ererun）、コタイク、ゲガルクニに至るまで接収した。彼はこの他にも多くの城々、村々を取った。

とある。これは、アルスランによって与えられた地域に一致する。

モンケの勅書によると、スムバトが与えられたのは、「バイジュと彼の部将によって占領された国々の隣」の地域であると限定されている。バイジュが征服した地域は含まれない。バイジュ自身の占領地について言及するところのものはないが、彼の遊牧地について、ステパノス（Saint-Martin, II, 128）は、

彼はハバンド（Haband）地方のツァゲヅォル（Tsagëdzor）の入口に野営した。

と述べる。ツァゲヅォルはヴォロトン河中流左岸の谷である。また、ドミニコ会修道士アンセルム（Anselme）は、一二四七年六月バイジュの軍営に赴き、七月二五日に面会を許されたが、その時バイジュが駐屯していたのはスィスィアン（Sisian）又はスィティアン（Sitian）城の近くであった。[2] 次にキリキア王ヘトゥム（Het'um）一世がモンゴリアからの帰途バイジュのものを訪れた折も、彼はスィスヤン（Sisean）に滞在していた（Dulaurier, p. 470）。またルブルク（Guillome de Rebrouque）もモンゴリアからの帰途一二五四年一一月クル河とアラス河の合流点を渡ってアラス河左岸に沿って進み、バイジュの宿営地を訪れてその家で供応を受けた。[3] バイジュの遊牧地は、アラス河支流のヴォロトン河流域で、夏にはツァグ谷を経てスィスィアン城付近にあり、冬にはアラス河本流沿いの低地であった。ザカフカースを征服したモンゴル軍は、先ず遊牧地を割り当て、部将銘々が自己の遊牧地内の在地勢力を制圧したの

であるから、ヴォロトン河流域付近がバイジュの征服地とされた地域であろう。ここより東はドピヤン、ハサンージャラリヤン家の所領となるのである。

さて、一二七二年のエゲルヅ・カルミル・アストゥァツィン（Egherdzu Karmir Astuatsin）の碑文（Kostaneants', p. 114）に、タルサイチは自ら、

バルクシャト（Barkushat）とドヴィン（Dvin）の平原の間の全州を統治する者。

と称し、一二七四年タテフの碑文或いはこれを引用するステパノスの年代記（Kostaneants', p. 114; Saitn-Martin, II, 146）には、タルサイチが、

バルクシャトからブジニ（Bjni）の境界に至る諸地方を支配する。

とある。バルクシャトはスィウニク地方東南バグク地方にあって、リパリトがイヴァネに与えられた諸城に数えられている。また、バルクシャトに対比して挙げられるブジニ[4]の存するアイララト州ニグ（Nig）地方はセヴァン湖西岸でスィウニク州ゲガルクニ地方と接する。ドヴィンはガルニ（アザト）河左岸に存する。同河左岸のガルニ[5]に面したエレルン或いはエレロンまでがスムバトに与えられたが、この河の流域がコタイクである。すなわち、オルベリャン家の所領はスィウニク州南東端のバグク地方より、同州北西端ゲガルクニ地方、アララト州東南コタイク地方に及ぶわけである。オルベリャン一族が行った所領の寄進と贈与、教会堂修道院の新設改築等の行為を記した碑文、年代記に見える関連の地名を捜すと概ねこの間に見出される。

更にステパノスの年代記に（Shahnazarean, II, 106）

我々はアザト（Azat）村をクラカハガツ（K'urhakakhaghats'）と呼ばれる高く見わたしの良い頂から、イェレ

ヴァン（Yerewan）、ホゴツモツ、（Hoghots'mots）、チャヴァヅォル（Chawadzor）、アコリ（Akorhi）の頂に至る全周、付近の山と原とを共に与えた。これに加えて、私の手植のツァガカヅォル（Tsaghkadzor）の葡萄園を私の甥ブルテルの養育のために与えた。

とある。スムバトが甥であるブルテルに対し、彼等の兄であり父であるエリクムから継承した所領の一部を分与したのである。イェレヴァンはコタイク地方には属するが、ガルニ河の西フラズダン（Hrazdan）河岸に存する。アコリはアラス河右岸に位置するアララト州アルノヨトン或いはマセスィヨトン（Arnoyotn, Masesyotn）地方の地名である。ここよりフラグの夏の宮殿の置かれたアラタグまでは、百粁程隔たるに過ぎない。このようにして、同家所領は更に西及び西南に拡張される。

かくして、一三〇六年エゲギスで写された写本奥付（Sanjian, p. 54）に、

この州における諸侯ブルテルの統治間。

とある。これはスィウニク州全体が同家領に含まれることを言うものであろうか。これに反証する一例を掲げれば、一三一三年ヴァヨッヅォルのグラヅォル（Gladzor）村で筆写された写本奥付（ibid., p. 57）に、

この地方におけるババク（Babak'）とエアチュ（Each'u）の統治年間……

とある如く、リパリトがスィウニク州東部で知事に任命された時、ヴァヨッヅォル知事に任命されたハグバキャン―プロシャン家ヴァサクの子孫が健在である。同家はモンゴル人侵入前チャフク（Chahuk）地方のシャハポンク（Shahapōk'）城を中心としてヴァヨッヅォル南部、ヘルヘル、シャフルネツ（Shakhurnets'）、ヴァラジュニク（Varajunik'）、コタイク、セルグンク（Sergunk）、バシキャンド（Bashkyand）、ヴェルナシェン（Vernashen）、ボロラベルド

(Boloraberd)、エゲゲアッヅォルに所領を有した。オルベリャン家と同じくモンゴル人に仕え、ルーム・セルジュク朝との戦闘、バグダート作戦、マヤファルーキーン包囲戦で功績を上げた。[6]

アルスラン＝ノヤンに征服された全地域をスムバトに与える、というモンケの勅書にもかかわらず、また、バルクシャトからブジニ、ドヴィンまでを統治するというタルサイチの碑文にもかかわらず、オルベリャン家の所領を東西に分断する形でハグバキャン―プロシャン家領が存続し、オルベリャン家は所領の一円的集積をなすには至らなかったのである。[7] これは、一四世紀後半所領がヴァヨツヅォルとヴォロトンに二分されることと関係があると察せられる。

第二節　オルベリャン家領の帰属

スムバト・オルベリャンの所領がグルジアや他の地方の課税台帳から除かれていたことは既に述べた。アバガ即位後の官職授受の記事（Ализаде, сказ. выше, стр. 102）に拠ると、グルジスターンはダヴィティ五世と諸侯サドゥン・アルツルニに与えられ、インジューの管理はアルタジュ＝アカ（Altājū Āqā）に命じられた。これは、インジューであるオルベリャン家領が税制上、或いは所領統治権の面で、グルジスターンには属さないことを意味しよう。

次にイル＝ハン国の行政上或いは徴税上の地方区分とオルベリャン家領及びスィウニク州との関係を論じよう。

バグラト朝グルジア王国の領土は、イル＝ハン国の地方区分に照らして見ると、大略「アブハーズ及びグルジスターン州（Vilāyat-i Abkhāz va Gurjistān）」に一致する（Mustaufī, ṣ. 108）。ムスタウフィー（Muḥammad Mustaufī-i Qazvīnī）は、この境界について（ibid., 108）、

その境界はアルラーン、アルメニア（Arman）、ルームと接する。

とある。次に大アルメニア（Arminiya al-Kabīr）について（ibid., ṣ. 117）、

その境界は小アルメニア（Arminiya al-Saqīr）、ディヤールバクル、クルディスターン、アーザルバーイジャーン、アルラーンに接している。

とある。また、アルラーン及びムガーン州について（ibid., ṣ. 103）、

その境界はアルメニア、シールヴァーン、アーザルバーイジャーン、カスピ海に接する。

とある。アーザルバーイジャーン州については（ibid., ṣ. 85）、

その境界は、イラーク・アジャーム、ムーガーン、グルジスターン、アルメニア、クルディスターン州に接する。

とある。これらの記事に適合する境界線を引くことは不可能であり、これら四州のほぼ中央に位置するスィウニク州（nahang）が含まれる州は以上の記事からは明らかにならない。

さて、スィウニク州は南西にヴァスプラカン（Vaspurakan）州のナフチャヴァン（Nakhchavan）、ゴグトン（Goghtn）両地方と接する。アルメニア人の言うナフチャヴァン、ゴグトンに当るイル＝ハン国の区分はアーザルバーイジャーン州ナフチヴァーン・トゥマン（tūmān-i Nakhchivān）である。このトゥマンはナフチヴァーン、アジナーン（Ajnān）又はカールハーネ（Kārkhāna）、アーザード（Āzād）、オルドゥーバード（Urduābād）、マークー（Mākūya）の五シャフル（Shahr）からなり、ナフチヴァーン・シャフルには、アリンジャーク（Alinjāq）、スールマーリー（Sūrmārī）、タグマル（Taghmar）、ファガーン（Faghān）の如き堅固な要塞が存する（ibid., ṣ. 102）。アリンジャク或いはエルンジャクは、アリンジャク＝チャイ河上流の有名な山塞で、エリクムがエルディグズ朝のアタベクに与えられた領地の一つであった。オルドゥーバードは、スィウニク州コサカン地方、カールハーネはアルツァフ（Artsakh）州すな

わちカラバグのディザク（Dizak）、でアジナーンには銅山があったのでカールハーネと呼ばれる。マークはアラス河右岸のヴァスプラカン州アルタズ（Artaz）地方の中心地である。

ところで、イル＝ハン国の歴史書『ヴァッサーフ史』（Vaṣṣāfs. 640）には、一三一九年アブーサイド＝ハンの元帥チョバン＝ノヤンと反乱軍が戦ったセヴァン湖に近い戦場について

ナフチヴァーンの付属地（或いは近郊 navāhī）、ギョクチェ・デンギズ（Kukcha Dinkīz, sic.）の岸辺において……

と記す。ギョクチェ・デンギズすなわちセヴァン湖がナフチェヴァーンの付属地とされているのである。次にアブリーの『シャイフ＝ウヴァイス史』に、ジャラハル朝のシャイフ＝ハサンは、イランの統治権を掌握し、一三三八年（van Loon, p. 164）、

シャルール（Sharūr）とドヴィン（Dvin）をナフチヴァーンに至るまでアクジー（Akjī）のむすこハサン＝ベク（Hasan Bik）に、カラバグの入口からグルジスターンの入口までをアミール＝スルガン（amīr Sūrghān）に、シャルヴァーンと前線をイキンジ（Iqinjī）のむすこシャイフ＝チョバン（Shaikh Chūbān）に、ムーガーンとバールーン（Bārūn）の千戸を自分のむすこユースフシャー（Yūsuf Shāh）に［与えた］。

とある。アラス河中流左岸は、①シャルール、ドヴィン、ナフチヴァーン、②カラバグの入口よりグルジスターンの入口まで、すなわちカラバグ地方、③ムーガーンの三地域に区分されている。ドヴィン、シャルール、ナフチヴァーンが合せて統治上の一単位とみなされている。スィウニク州とアララト州シャルル、アラツ（Arats）、ウルツ、コタイクがこの地域に属する。オルベリャン家のほぼ全所領はこの中に含まれる。

次に、ステパノス・オルベリャン（Shahnazarean, I, 52-53）は、スィウニク州の地理を述べて、同州は、

首都（mayrak'aghak'）ナフチャヴァンを持つ。

と記し、スィウニク州をナフチャヴァンに含めている。このように、一三—一四世紀にスィウニク地方は、グルジスターンや大アルメニアではなくナフチヴァーンに属するとみなされていた。オルベリャン家領のほぼ大部分もまたナフチヴァーン地方に属した。

ステパノスがスィウニク府主教に就任して以来、この地位はオルベリャン一族によって独占したことは既に述べた。同家の歴代当主は、タテフ、ノラヴァンクを初め、各地の修道院に所領の寄進をおこなったが、大主教位の独占によってそれらの管理権は同家の手中に留まった。当時アルメニアに上級僧職の特定家系による独占が進み、主教区或いは大主教区そのものが私領視される傾向が生じていたのである（Бабаян, стр. 197-221）。オルベリャン家の支配圏は、スィウニク大主教管区の面からも検討する必用があろう。スィウニク大主教管区内の主教座中タテフとノラヴァンクはオルベリャン家との関係が強かった。ステパノス（Shahnazarean, II, 108）は、ノラヴァンクの第三代主教テル＝サルギス（tēr Sargis）の死後、

アルメニアの大カトリコスであるテル＝コスタンディンのもとに赴き、再び、この聖なる主教座、ヴァヨッヅォルの大部分、ナフチャヴァン、チャフク地方からなる主教区を掌握したテル＝ステパノスから位を継いだ。

と記す。ノラヴァンクの主教管区は、ヴァヨッヅォルの大部分、チャフク、ナフチャヴァンの三地方からなっていたのである。

また、ステパノス（Shahnazarean, II, 109-111）は、一二九〇年ごろオルベリャン家とハグバキャン—プロシャン

家との間に生じた一事件について次のように述べる。

ヴァサクのむすこで、自分の領地と村々をヴァヨッヅォルに持つプロシという名のある諸侯は、他の教会を横領しょうと欲した。

彼はカトリコス＝コスタンディン二世のもとに使者をつかわして偽りの申告を行い、エルンジャクを与えられ、モンゴル人の千戸長の力を借りて実力でこの地方を接収した。これに対して、オルベリャン家側にあるノラヴァンクの第六代主教サルギスと第五二代のタテフ主教ホヴハネスは、コスタンディンに替ったカトリコス＝ステパノス(Step'annos Hrhomayets'i 在位一二九〇—一二九四年)からプロシの行為を批難する教書を得て勝利し、エルンジャク地方はタテフ主教座に属することになった。オルベリャン家はノラヴァンク、タテフ両主教を通して、またステパノスの大主教就任後は代々一族出身の大主教を通じて、ナクチャヴァン、エルンジャク両地方を掌握することができたのである。

註

(1) 世襲地を指して "hayrenik'" 封地に対して "ark'ayatur" の語が用いられる。個々の諸侯 (ishkhan, paron) の持つ支配権の総体は ishkhanat'iwn, paronut'iwn と呼ばれる。

(2) P. Pelliot, Les Mongols et Papauté, chap. II, (*Revue de l'Orient Chrétien*, t. IV ((XXIV)), Nos. 3 et 4. Paris, 1924 pp. 295-302 参照。Sisean 及び Sisian は Sisakan の異称であり (Saint-Martin, I, 514; Yovhannēsean, p. 432) 現在も Sisian と呼ばれる (*Армения-Советский Союз*, Москва, 1966, стр. 300; Атрас Арм. ССР. повсюду)。リベリトがイヴァネ・ザカリヤンに与えられたスィウニク城はこれであろう。トマ・メツォベッィ (Nève, pp. 144-145) によると一五世紀初頭この地域には六千家族の人口があった。

(3) 護雅夫訳「カルピニ、ルブルク、中央アジア蒙古旅行記」一九六五年、三〇二—三〇六頁。

(4) ブジニはアヴァグ・ザカリヤンの本拠であった。Yovhan-

nēsean, p. 414 参照。

(5) "shariat", "balakhanhak", "bazh" 三種の税の廃止に関する一二九一年のガルニの碑文に拠ると、ここはアヴァグ・ザカリヤンの娘ホシャク(Khoshak')の所領であった(H. Field, ed., A. Krimgold, tr., *Contributions to the Archaeology of Armenia*, Cambridge, Mass., 1968, p. 52)。

(6) Бабаян, p. 215; Mécérian, p. 288-290. 同家に関するモノグラフに G. Yovsēp'yan, *Khaghbakeank' kam Prhoseank' Hayots' Patmut'ean mech*(『アルメニア史に於けるハグバキャン或いはプロシャン一族』)、3 vols., vol. I, Vagharshapat, 1928; vol. II, Jeruselem, 1944; vol. III, New York, 1942-1943; Rep. Antélias, 1969 がある。

(7) グルジアを逃れてアゼルバイジャンのエルディグズ朝に仕えていたエリクム一世は、カライスラ、チャフク、エルンジャク及びナフチャヴァン市の三つの門(kughpak)を与えられていた(Saint-Martin, II, 102, 106)。これらに対する所有権がその後どうなったかは不明である。

(8) Yovhannēsean, pp. 348-353; P. Мамедов, Новые данные о средневековой истории крепости Алинджа, *Материалы по истории Азербайджана*, IX, Баку, 1973 参照。スルマリは恐らくアラス河右岸、現在の地名でカウイズマン(Kağizman)とイウディル(Iğdir)のほぼ中間に存する名高い要塞であろう(Yovhannēsean, pp. 820-823)。

(9) ガジャール朝の支配下にこの地方は、①ウルツァゾォル以西のイェレヴァン=ハン領、②ハガル(Hagaru)河以東のカラバグ=ハン領、③両ハン領に挟まれるナフチャヴァン=ハン領に三分される。ナフチャヴァン=ハン領の北界はセヴァン湖とアラス河の分水嶺であって、スィウニク州はゲガルクニとソトクを除いた外は、ここに含まれる。サファヴィー朝下の境界もほぼこれに同じであるが、ナフチャヴァンはチュフーレ・サアド(Chukhūr-i Sa'd)ベグレルベギ領に属する(Ардас Арм. ССР, стр. 107; H. Zh. P., 251-253; V. Minorsky, *Tadhkirat al-Mulūk*, London, 1943, 102)。

(10) ナクチヴァン・トゥマンの一部であるマークー近郊の聖タデオス(Surb T'adēos)には一三世紀中葉、主教座が設置された。この設立にはステパノス・オルベリヤンの力があった。従って、政治的にもオルベリヤン家とマークー地方との関係が予想されよう。L. Khachikyan, Artazi Haykakan ishkhanut'iunē ew Tsortsor Dprots'ē(「アルタズのアルメニア人諸侯領とツォルツォル学派」) *Banner Matenadarani*, No. XI, 1973 参照。

(11) 一三三一年ヴァスプラカン州アルベルニ(Arhberuni)地方のアルゲリヤン(Argelean)修道院

で記された写本奥付（Sanjian, p. 70）に、「弓矢の民のスルタン＝アブーサイド、諸侯中の諸侯ブルテル及び我等アルメニア人のレヴォン（Lewon）王の治下に」とあり、一三四九年同地方イェレリン（Ererin）村に近いイェレラン（Ereran）修道院で記された奥付に「勇敢なるアルメニア人の武将達、敬虔篤信の諸侯中の諸侯ベシケンとイヴァネの治下に」（Sanjian, p. 87）とある。ヴァン湖北東岸のベルクリ、すなわちイル＝ハン国の地方区画では大アルメニア州ビルグリー（Birguri）が、オルベリヤン家領であったことが考えられる。

第三章　近隣諸侯との関係と婚姻政策

エリクムがモンゴル人の武力を背景に所領を拡張したことは、近隣の諸侯との軋轢の原因となった。オルベリヤン家はこれをどのように処理したかを、近隣諸侯家との通婚関係と合わせて論じよう。

アヴァグ・ザカリヤンと妻ゴンツァがエリクムとスムバトに対して抱いた敵意は、オルベリヤン家の人々の良く知るところであった（第一章参照）。最初のカラコルム旅行から帰ったスムバトが、勅書によって保証された地域を接収したことは、アヴァグの一族郎党とグルジアの貴顕の嫉妬をいっそうかきたてた。アルグン＝アカに対するオルベリヤン家攻撃許可の請願は、その最も露骨なあらわれであった。彼等の請願は少からず効を奏した。モンケに安堵された所領の一部が失われたので、スムバトは再びカラコルムに赴いたのであった。

ババヤン（Бабаян, стр. 137）は、二度目のカラコルム旅行から帰ったスムバトが敵対派諸侯に報復し、それが一二五九―一二六一年のグルジア反乱の原因となった、と述べる。しかし、ステパノスに拠ると、帰国したスムバトは（Saint-Martin, II, 144）、

彼は改めて自分に属する諸地方と諸城を統治した。しかし、彼等〔敵対者〕との間に平和と友好を持とうとした結果、彼は自分の意志によって、残余に対する家族と子孫の世襲地所有権を保証するために、諸城、諸地域の内のいくつかを放棄した。

のである。ステパノスはスムバトの敵対者について、アヴァグとゴンツァ以外には氏名を記さないが、彼等はオルベリャン家の所領拡大の被害をこうむった諸侯、領主であるとみなして大過ないであろう。スムバトはモンケの勅書のみを頼みとはせず、所領について近隣の諸侯に譲歩し、彼等の宥和を試みたのである。グルジアの反乱の時、アヴァグの未亡人で、グルジア王ダヴィティ五世ラシャと再婚していたゴンツァは、嬰児ディミトリと共にブジニ城に残されていた。母子は捕えられてオルドに連行された（Brosset, I, 557）。ステパノス（Saint-Martin, II, 150）は、

スムバトはアヴァグ家の後見人（hayradir）であったので、他の諸侯達の勧めを採り、また、フラグの命令によって、アヴァグの妻ゴンツァを海で殺し、彼自身がアヴァグの所領を治めた。

と述べる。すなわち、ゴンツァの処分とアヴァグ遺領の統治を巡る重要問題が、他の諸侯と協議されている。王に従って反乱に加わった者の中心はカルトリ（Kartli）、ヘレティ（Hereti）の諸侯であった。他の多くの諸侯、特にアルメニア人諸侯はモンゴル軍に加わった（Brosset, I, 556-557）。グルジア年代記（Brosset, I, 556）は、反乱の原因を王に課された重税のためであるとする。スムバトの報復が一二五九年の反乱の原因となったとするのは妥当ではない。

さて、エリクム一世は、モンゴル人の侵入前、ウルツの領主マミコニャン家のグリゴル・マンツネツィの娘タムカと結婚した（Saint-Martin, II, 112; Kostaneants', 103）二人のむすこブルテルは所領支配権を与えられなかった

が、彼が得た世襲地はヴァヨツヅォルよりイェレヴァン、アコリに至る地域であって、ウルツはここに含まれる。

スムバト自身の妻について、ステパノスは一切言及していない。彼の生存中に弟タルサイチは二人の婦人と結婚した。これをスムバトの通婚政策とみなして良いであろう。タルサイチの最初の妻について、すなわち自分の生母について、スパテノス（Saint-Martin, II, 146）は、

彼は自分の妻をムスリムの間から選んだ。スィウニクの領主（tēr）の娘アルズ＝ハトゥン（Aruz Khat'un）で、彼女はキリスト教徒となった。

と述べ、一二八六年の年次の入ったタテフの碑文（Kostaneants', p. 128）には、

サドゥン（Sadun）の娘であるアルス＝ハトゥン（sic.）と夫である諸侯タルサイチ、

とある。スィウニクのムスリム領主サドゥンの娘アルズ或いはアルスを娶った。[1] 彼女はエリクム、ステパノス、パフラドラの三子を生んだ。次に、タルサイチはグルジア王ダヴィティ五世と共にハチェン（Khach'en）の諸侯ハサン・ジャラリヤン家のアタパク（At'apak）のもとに行った折、その時アルズ存命中にもかかわらず、アタパクの姉妹ミナ＝ハトゥン（Mina Khat'un）と結婚した。ステパノスは、

教会の諸法典と博士（vardapet）達がこの行為に反対であったにもかかわらず、彼は妻を自分の家に入れ、類いまれな美しいむすこジャラルと三人の娘を得た。

と述べる。一二七〇年のことである（Saint-Martin, II, 160）。彼女の名は多くの碑文の中に見いだされる。[2] （Kostaneants', 116, 118, 148–149）。ハサン・ジャラリヤン家は低ハチェンを領有する諸侯で、グルジア王国領北東アルメニアでは、ほとんど唯一ザカリャン家の優越性に服さなかった。その所領はスィウニク州東境でオルベリャン家領と

接していた（Бабаян, стр. 27-28）。

タルサイチはミナから二男三女を得たが、ステパノス（Saint-Martin, II, 160）は、

彼は長女をハチェンの光輝ある諸侯、大グリゴルのむすこハサンのむすこグリゴルに嫁がせた。

と記す。すなわち、ハチェンの今一つ有力な諸侯でオルベリャン家領の北東にその所領の接するドピヤン家のグリゴルに長女を与えた。パタヴァンク（Khatay Vank'）の寄進碑文に、

大諸侯タルサイチとミナ＝ハトゥンの娘、強大な諸侯グリゴルの妻であるアスパ（Asp'ay）。

とあって（Kostaneants', p. 145）、彼女の名はアスパである。また次女についてステパノス（Saint-Martin, II, 160）の年代記には、

他の一人は父の死〔一二九〇年〕後、兄弟達によってグルジア王の一族と婚約が行われ、ディミトリ王のむすこダヴィティ王の弟マヌエル（Manuel）のもとに嫁いだ。

とある。彼女の名はマムカン（Mamk'an）であった（Shahnazarean, II, 238）。

また、ステパノス（Saint Martin, II, 174）は、タルサイチのむすこ、すなわち自分の兄エリクムにはブルデル、ブグダの二子と一女があり、彼女を彼は、

大諸侯プロシのむすこハサンのむすこエァチェに嫁がせた。

と記す。ハグバト（Haghbat）の碑文によると彼女の名はママ＝ハトゥン（Mama Khat'un）である（Brosset, III, 322）。ステパノスが年代記を脱稿した一三九〇年代末までにハグバキャン―プロシャン家との通婚がなされた。エルンジャクを巡るグラゾォル、タテフ両主教座間の紛争が終った数年後のことである。

また、エリクムの従兄弟リパリトの長子スムバトは（Saint-Martin, II, 174）、アタベク＝サドゥン家と通婚した。

が、一三一七年のヘルヘルの寄進碑文によると（Kostaneants', p. 158）、役女の名はヴォフトグであった。スムバトの弟チェサルの妻ホリシャフはドピヤン家のヴァルダン（Vardan）の娘であった（Kostaneants', p. 165; C. F., Ulubabayan, pp. 325-326）。

これらの実例は一三世紀と一四世紀初頭に行われた一族の婚姻の一部に過ぎないが、オルベリャン家の意図する所は明らかであろう。同家は所領の境界を接する諸侯家ドピヤン、ハサン・ジャラリヤン、ハグバキャン－プロシャン、またアタベギ（アタバク）職、アヴァグ領の支配権を巡って競争する立場にあったアルツルニ家、更にグルジア王家と婚姻を取り結んだのである。

オルベリャン家は所領に関して近隣諸侯に多少の譲歩を行うとともに、彼等の子女と通婚する政策を採ったのである。

註

（1）ババヤン（Бабаян, стр. 113）はアルズがモンゴル人であったとするが、その根拠は不明である。

（2）彼女について、Г. Овсепян, Потомство Тарсаича Орбеляна и Мина-Хатуны, *Христианский Восток*, 11, С-пб, 1913 があるが未見である。

第四章　グルジア王とオルベリヤン家

エレミヤン（Елеміян）、ババヤン等は、[1] スムバトが次第に自主傾向を深めてザカリヤン家の上級領主権からも王権の支配からも離脱し、自ら王号を採用したものとみなした。しかし彼等はスムバトの独立と彼の弟タルサイチのグルジア王のアタベギ職就任との矛盾する関係は説明しない。この章では碑文、年代記に見えるオルベリャン家当主の称号と、グルジア王との個々の政治的交渉に基いて、この説の検討を行おう。

一三世紀初頭、リパリトはイヴァネ・ザカリヤンの家臣として、スィウニク州における政治的経歴を歩み始めた。リパリト自身が建立した碑文の数は少いが、一二二二年のヴォルトハルブの碑文（Kostaneants', p. 66）に、

アルメニア暦六七一年。私リパリトは神の御望みによって。

とあって、どのような称号も付されていない。のみならず、彼の子孫がリパリトの名に触れるにあたっても、他の祖先の場合とは異ってどのような称号も冠せず、単に「大（mets）」と呼ぶに過ぎない。[2] またステパノスはエリクムがリパリトの所領を世襲したことを述べて（Saint-Martin, II, 112）、

父の領地（tērut'iwn）を治めた。

と述べる。リパリトは、「イシュハン」や「パロン」ではなく単に「テル」と呼ばれる領主の身分にあったのであろう。エリクムについてもその父と同様のことが言える。

さて、一二五八年グルジア王ダヴィティ四世がナフチェヴァンにあったフラグのオルドよりアブハズィアに逃れる途中、オルベリャン家領を通過するが、グルジア年代記には（Brosset, I, 545）、

ダヴィド・ナリンが簡素な身形でアタベグ＝アヴァグの領地に着くと、途中狩をしていたスムバト・オルベリャンに遇った。

とある。当時グルジア宮廷からはオルベリヤン家の所領が、アヴァグ・ザカリヤンの領地に含まれるものとみなされていたのであろう。スムバトがザカリヤン家の上級領主権から脱したのは、ゴンツァを殺し、それまで彼女が治めていたアヴァグの遺領を統治するようになった以後であろう（第三章参照）。

さてこれらより一〇年程早い一二五二年のゴシャヴァンク（Goshay Vank'）の碑文（Kostaneants', p. 94）に

大リパリトのむすこスムバト王（Ark'ay）の兄弟、諸侯中の諸侯タルサイチは……。

とある。一二五二年の年次が正しいかどうかは検討を用するが、スムバトのために「アルカ」の称号が用いられていることに注意しなくてはならない。スムバトの名に冠されている称号は、「諸侯（paron）」、「諸侯（ishkhan）」、「大諸侯（mets ishkhan）」、「諸侯中の諸侯（ishkhanats' ishkhan）」、「王の如き諸侯（ark'ayashuk' ishkhan）」、及び「王（ark'ay）」の六種である。彼を王と称する最も年次の早い一二五二年のゴシャヴァンクとノラヴァンクの碑文は、前者は先に引用した如く弟タルサイチが刻んだものであり、後者（Kostaneants', p. 148）は、

スムバト＝アルカの弟タルサイチは……。

とある。これもタルサイチの土地寄進碑文であって、両者共にスムバト自身によるものではない。次に、一二七三年の年次が入るノラヴァンクのスムバトの棺（Kostaneants', p. 116）には、タルサイチが「スムバト王」の名と称号を記させ、一二七五年に兄のために建立した墓堂（ibid., 118）に、

私、諸侯中の諸侯タルサイチは自分の兄スムバト王の墓堂を建立した。

と刻ませた。また主教ステパノスの年代記（Hakobian, II, 41）でも「スムバト王の弟タルサイチ」と呼ばれる。これらはスムバト生前のものではないから、勿論自称ではない。スムバトが自分自身の行為に関して刻んだ碑文中に

は、「諸侯中の諸侯」（一三六二年ノラヴァンク Kostaneants', p. 103）、「諸侯（ishkhan）」（一二六五年ダティヴァンク（Dati Vank'）ibid., 107）と称するのみである。ステパノス・オルベリャンも伯父スムバトを「王の如き」と形容する（Shahazarean, II, p. 109）が王とは呼んでいない。

スムバトの地位を継いだタルサイチは、「王」を除き、スムバトと同じ称号で呼ばれたが、「王の如き」については自称していない。[3]

スムバトが「王」、タルサイチが「王の如き」と呼ばれたのに対し、彼等の後継者にはこのような尊厳な称号は用いられなかった。スムバトに対して用いられた王号が、グルジア王、キリキア＝アルメニア王の王号と同じタガヴォル（t'agawor）では無いにしろ、王と呼ばれたことは、所領の内外に示した実力と権威を表すものであろう。[4]

では、実際に両者どのような関係があったのであろうか。ステパノス（Saint-Martin, II, 154）は、

スムバトは彼に忠実に従い、フラグ＝ハシと他の高位の人々、更には皇帝の宮廷において大いに彼に奉仕した。

と記す。王はスムバトの奉仕を喜び、

ダヴィト（Arm., Dawit'）の方でも彼を自分と同輩視し、実子同様に育てるように自分の年若いむすこディミトリを彼の両腕に託した。

のである（ibid., 154）。すなわち、ゴンツァの生んだグルジア王子で、後にダヴィティを継いで王位に登るディミトリの師傅たる地位を得たのである。また、ステパノス（Saint-Martin, II, 154, 156）は、

フラグのスムバトに対する信頼は、スムバトの望みの者の生死を決することができる程であったので、ダヴィトを廃位させようとする多くの野心ある貴族（metsamets）を滅した。万人が彼を恐れ、彼に注目した。

と述べる。[5] このようなスムバトの奉仕に対し、王は莫大な下賜品を与えて彼の意に報おうと、彼をトビリスィの宮廷に召喚した。望みの品を述べよとの王の言葉に、

スムバトは彼の足下にひれ伏し、彼の前に身をかがめ、

ギオルギ三世によって発布されていた同家一族に対する呪逐状の廃棄を求めた。王はこれを許してその勅書を火中に投じ、スムバトには莫大な栄誉の品々を与え、王家の栄服を手づから着せた（Saint-Martin, II, 154-158）。両者の間に君臣関係の存したことは明らかであろう。

さて、スムバトはグルジア王子ディミトリの師傅の地位にあった。ダヴィティ王とスムバトは共に一二七二年に死亡し、スムバトの所領支配権を得たのはタルサイチであった。ステパノス（Saint-Martin, II, 160）は、

ダヴィト王の死後、タルサイチは自分の家から彼のむすこディミトリを去らせた。彼を彼の父の命令によって育て上げ、多くの労苦の末、一二七二年グルジアの王位に即けるに至った。

と記し、ディミトリの即位にはタルサイチの功績が大であったことを主張する。しかし、新王のアタベギ職、アミルスパサラリ職に就いたのはサドゥン・アルツルニであって、タルサイチは全く官職を得ていない。しかし、サドゥン死後の一二八四年、王はアルグン＝ハンのオルドからの帰途、アラス河中流左岸のシャルル（Arm. Sharur）にタルサイチを召喚し（Saint-Martin, II, 164）、

名誉をもって彼をもてなし、栄服を与えた。多くの懇願の後、彼をアヴァグに割当ててあったアララット地方に連れて行き、彼を王国のトビリスィとアニとカルスの間の地域のアタバクになした。また、むすこ達ダヴィティとマヌエルを彼の養育の世話に委ねた。

タルサイチは、旧アヴァグ領の統治権、二王子の師傅職、アタベギ（アタバク）の地位を得たのである。アヴァグ遣領は王子ダヴィティの采色とされていた（Brosset, I, 602）ので、この地域の統治権獲得は、師傅就任とかかわるものである。ステパノス（Saint-Martin, II, 164）は、「トビリスィとアニとカルの間の地域のアタバク」を

アルメニアの国のアタベク職（at'abakut'iwn ashharhis Hayots'）。

と言いかえる。[6] タルサイチがグルジア王の家臣であったことも疑うことができない。

この時、再びオルベリャン家のグルジア国政における権力は強化されたが、やがて一二八九年のディミトリの刑死とフトルブカ・アルツルニの擁立したヴァフタンギ（Vakhtangi）二世の即位、一二九〇年のタルサイチの死亡により、その権力は再びアルツルニ家のものとなった。

スムバトとタルサイチはグルジア王に臣従したが、その関係にはこの時代に特殊な事情があった。スムバトはイル＝ハンのオルドで王に奉仕したのであって、グルジアの王宮においてではなかった。しかも所領支配権の継承、ステパノスの大主教就任を巡る紛争等がグルジア王ではなく、イル＝ハンによって裁定されているのである。オルベリャン家は王とイル＝ハン両方に直属したのである。オルベリャン家の自立傾向とは、彼等が王権とイル＝ハンの支配権のどちらにより近いかの問題であった。これは、彼等が王権を介してモンゴル人支配を受け入れたのではなく、一二三六年以降は独自に所領統治権を保全したことによるのであろう。

一二世紀以降、大アルメニアの領主層は、グルジア軍の援助によってムスリム政権を打倒し、グルジア王国の領土内で事実上の自治を享受したが、グルジア王とアルメニア人諸侯との連帯は政治面に限られた。一三世紀初頭ザカリヤン家とよって両教会の合同が企てられたが、聖職者層の反対にあって失敗した。ザカフカズに居住するアルメニア人

は精神的にキリキア＝アルメニア王と結ばれ、その関係は写本奥付の記載にも影響している。アルメニア語写本奥付は、写本筆写完成の時の当該地域の聖俗の支配者の名を記すことが多い。サンジャンの史料集から一四世紀スィウニク地方で記された奥付の内、グルジア王或いはキリキア＝アルメニア王の名を記す全二〇点を選ぶと、[7] その内八点は「アルメニア人の王ベトゥムの統治年間」のようにキリキア＝アルメニア王の名のみを記し、他の二点は、[8]「キリキア＝アルメニアの王座を取ったレヴォン（Ghewon）王、グルジアと大アルメニアのギオルギ王の統治年間」の如く両国王の名を記す。また、この内八点はイル＝ハンの名を記す。また八点は、諸侯オルベリャン或いはハグバキャン＝プロシャンの名を記す。すなわち、これらの奥付を記した一四世紀の写学生の眼には、スィウニク地方に対するグルジア王の支配権は映っていないのである。[9]

註

(1) С. Т. Еремян, *Очерки истории СССР*, ч. II (XIV–XV вв.), Москва, 1953, стр. 690; Бабаян, стр. 133.

(2) Kostaneants', p. 94 (A. D. 1251), p. 103 (A. D. 1261), p. 107 (A. D. 1265), p. 114 (A. D. 1272), p. 116 (A. D. 1274)

(3) Kostaneants', p. 148（娘ミナ＝ハトゥンの碑文）, ibid., 131 墓碑銘）。主教ステパノスの年代記（Hakobian, I, 41）。

(4) ハチェンの支配者ハサン・ジャラルはタガヴォルを称していた（Kostaneants', p. 96; Н. Д. Миклухо-Маклай, Географическое Сочинение XIII в. на персидском языке, *ученые записки института востоковедения*, Т. IX, Ленинград, 1951, стр. 204.

(5)『グルジア年代記』（Brosset, I, 555）には、ゴンツァ王妃に敵意を持つ廷臣ジクル（Jikur）は、アルグン＝アカを通じてフラグ＝ハンにダヴィティの王の富と叛意を密告したが、これはスムバトの通報によって王の知る所となり、ジクルは処刑されたことが記される。

(6) この場合のアタベギは、摂政の職にあるものを差したグルジア官制本来の用法とは異って、領域支配者の称号として用いられている。

(7) Sanjian, p. 51 (A. D. 1306, Eghegis; p. 56 (A. D. 1310,

Yarates); p. 56 (A. D. 1313, Gladzor); pp. 62–63 (A. D. 1319, Khorvaget in Gegharkʻuni); p. 70 (A. D. 1331, Argelan); p. 70 (A. D. 1332, Gladzor); p. 70 (A. D. 1332, Kʻukʻi in Shahapunikʻ); pp. 71–72 (A. D. 1333, Nora Vankʻ)

(8) Sanjian, pp. 63–64 (A. D. 1321, Gladzor); p. 65 (A. D. 1323, Gladzor)

(9) グルジア王の支配権を明記する典型的な例はサナヒン(Sanahin)一三九九年の奥付に見え、その文面は「これは、常勝にして強大なバグラト王(五世)のむすこゲオルギ(七世)の治下に複写された」、とある(Sanjian, 116–117)。

結　論

本稿では、オルベリャン家のスィウニク地方領有の経緯と所領支配権を巡る動向を、モンゴル人との関係を中心に述べた。また同家所領の範囲、イル＝ハン国の地方区画であるヴィラーヤト、トゥマンへの帰属、近隣諸侯、グルジア王権との関係について簡単な分析を試みた。

チョルマグン＝ノヤンのグルジア王国征服は、グルジア女王ルスダニがアブハジアに避難して国家機構が壊乱した状態で各地の諸侯が現地停戦をしてモンゴル軍に降服する形でおこなわれた。チョルマグンは予め占領地を麾下の部将に割りあて、各部将は担当の地域の征服に当った。占領地の掌握は各部将の判断に委ねられ、彼等は或る諸侯から奪った所領を他の諸侯に与えた。バグラト朝の地方統治体制は、モンゴル軍の占領政策によって再編成されたのである。

スィウニク州におけるオルベリャン家とハグバキヤンープロシャン家の二重支配体制、就中オルベリャン家の所領

支配は、エリクムがアルスラン＝ノヤンに降服し、ヴァヨツヅォルからガルニ河に至る全地域を与えられたことで大きく変更された。これが同家隆盛の最初の契機となった。スムバトの二度にわたるカラコルム入朝は、最初の機会に得たものを一層拡大し、確実とした。一二五一年の入朝の折、スムバトはインジューに叙されたが、これは彼に不輸租権[1]と、後にイル＝ハンとの密接な関係をもたらした。

彼等の所領は、東はスィウニク州ヴォロトン河流域のバグラシャパトより、西はアララト州フラスダン河流域のイェレヴァン、カラスー河流域のアコリに達した。この間にハグバキャンープロシャン家の所領が存続した。オルベリャン家の一族はハグバキャンープロシャン家を始め、ドピヤン、ハサン・ジャラリヤン等の近隣諸侯と通婚し、彼等との関係は概ね平穏を保った。当主の地位の継承は、エリクムの後、スムバト（一二四三？―一二七二）、タルサイチ（一二七二―一二九〇）、エリクム（一二九〇―一三〇〇）、ブルテル（一三〇〇―四〇年代末）、ベシケン（四〇年代末―八〇年代ごろ）の順であった。碑文と写本奥付において一族の人々に与えられた称号に拠ると、一四世紀には、所領の共同統治観が現われた。ベシケンの後、所領はヴォロトンとヴァヨツヅォルに分割された。ヴォロトンをベシケンの兄弟イヴァネの子スムバト、ついでその子ベシケンが、ヴァヨツヅォルをイヴァネの子グルゲン、ついでその子タルサイチが継承した。同家はタルサイチとスムバトの時カラコユンル部のために所領を追われ、スィウニクの諸侯としては滅亡した。

オルベリャン領とスィウニク州は、恐らくイル＝ハン国のアーザルバーイジャーン州ナフチヴァーン＝トゥマンに属し、バグラト朝の領土から成るグルジスターン州からは分離されていた。所領支配権の承認は、グルジア王ではなく、イル＝ハンによって行われた。しかし、スムバトとタルサイチの在位期間中には、グルジア王との関係は密であ

った。スムバトは王子ディミトリ（後のディミトリ二世王）の師傅となり、タルサイチはディミトリの王子ダヴィティ（後のダヴィティ六世王）とマヌエルの師傅たるに加え、アタベギの称号を得、アララト地方を受封した。官職と所領を通じて、オルベリャン家はバグラト朝に結びついていたのである。一四世紀にはかかる密接な交渉は見出されず、アタベギの地位とアララト州は、ジャケリ家に与えられた。当時オルベリャン家領で記された写本奥付は、イル＝ハンとキリキア王の名を記しながらグルジア王に触れず、オルベリャン家がグルジア王に従属していなかったことを示す。

さて、オルベリャン家、アルツルニ家の台頭のもとに、アタベギ、アミルスパサラルの官職を失っていたザカリヤン家は、一三世紀末より勢力を挽回し、一四世紀初頭には一時的に両職を回復するに至った。また同世紀中葉ザカリヤン家の封臣アムベルドの領主、バチュチヤン家のクルド（K'urd Bach'ut'ean Amberdets'i）の活動が顕著であった。更にグルジア王国全体に視野を拡大するならば、一三一四年ギオルギ光輝王の即位以後、最も権勢ある諸侯は、王の外戚でアタベギ、アミルスパサラリの二官職を併せて受領した、西南グルジアのサムツヘ（Samtskhe）のジャケリ家であった。モンゴル人政権下のグルジア王国諸侯の急激な台頭の政治史的意義の解明には、オルベリャン家、アルツルニ家に留まらずジャケリ家の動向を示す必要があるのである。(2)

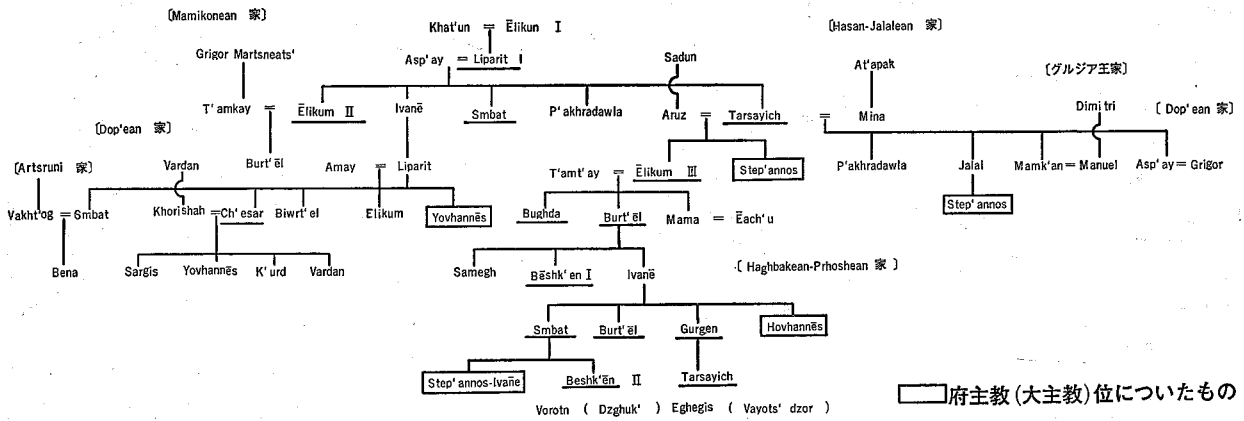
註

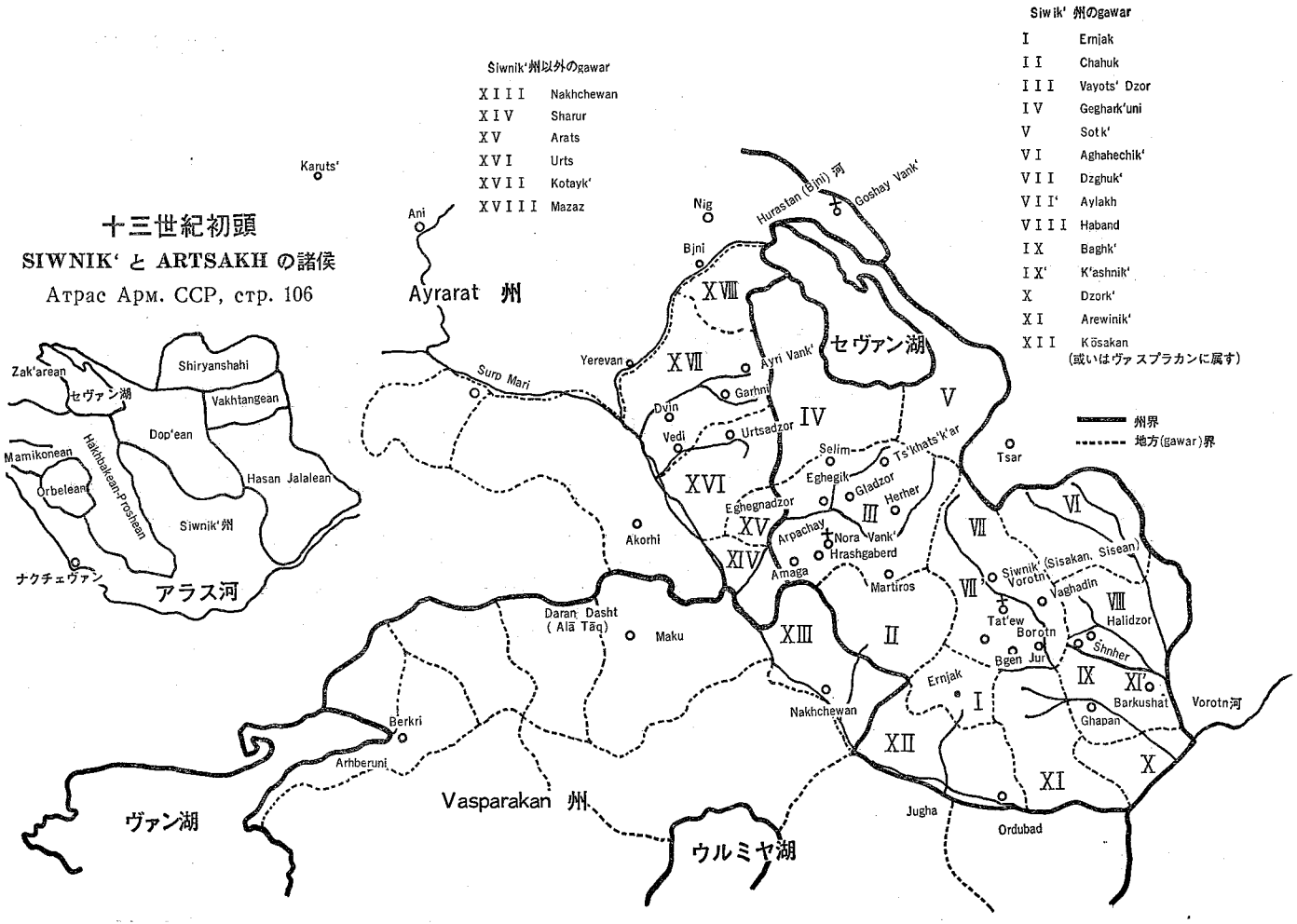
(1) ここでは税制、およびそれと深いつながりが見られる教会、修道院に対する土地寄進の問題には触れなかった。
ババヤン（Бабаян, стр. 197-221）は、一三世紀に土地寄進が盛んであった理由を、諸侯が自己の領地を外来者や他の王侯の横領から安全な教会、修道院の名儀に書き換え、その教会、修道院の運営は一族出身の高僧に委ねようとしたためである、と説明する。ステパノス・オルベリヤンによると、彼

の父タルサイチはアタベギに就任してアイララト州を与えられると王国の首都トビリスィに赴き、「君主の官衙（diwan ark'uni）に行って総ての帳簿（dawt'ar）を読み、帳簿からアルメニアの全修道院の名を削り、税（harki ew diwani）の賦課から除いた。しかる後に大官衙（awag diwanad-arut'iwn）に赴き帳簿の記載を改変し、百五十以上の修道院の名を抹消し、古くなったものを焼いた。このようにして全教会を解放した」（Saint-Martin, II, 164）のである。「ハルキ」は、税一般を表すが、「ディヴァニ」は国税としてイル＝ハンのディーヴァーンに納める税であろう。モンゴル帝国では一般的に聖職者は賦課を免除されていたが、イル＝ハン国ではキリスト教の僧侶に課税される例を見る。

（2）ジャケリ家については、拙稿「イル＝ハン国の西南グルジア支配とサムツヘ・アタベギ領（サアタバゴ）の成立」『史朋』七号がある。

スィウニク－オルベリヤン家系図




十三世紀初頭
SIWNIK' と ARTSAKH の諸侯
Атрас Арм. ССР, стр. 106
Siwnik' 州以外のgawar
XIII Nakhchewan
XIV Sharur
XV Arats
XVI Urts
XVII Kotayk'
XVIII Mazaz
Siwik' 州のgawar
I Ernjak
II Chahuk
III Vayots' Dzor
IV Geghark'uni
V Sotk'
VI Aghahechik'
VII Dzghuk'
VII' Aylakh
VIII Haband
IX Baghk'
IX' K'ashnik'
X Dzork'
XI Arewinik'
XII Kōsakan
(或いはヴァスプラカンに属す)
州界
地方(gawar)界
Zak'arean
セヴァン湖
Shiryanshahi
Vakhtangean
Dop'ean
Mamikonean
Orbelean
Hakhbakean-Prosłean
Hasan Jalalean
Siwnik'州
ナクチェヴァン
アラス河
Karuts'
Ani
Ayrarat 州
Nig
Bjni
Hurastan (Bjni) 河
Goshay Vank'
Yerevan
Surp Mari
Ayri Vank'
セヴァン湖
Garhni
Dvin
Vedi
Urtsadzor
Selim
Ts'khats'k'ar
Tsar
Eghegik
Gladzor
Herher
Eghegnadzor
Arpachay
Nora Vank'
Hrashgaberd
Amaga
Martiros
Akorhi
Siwnik' (Sisakan, Sisean)
Vorotn
Vaghadin
Halidzor
Tat'ew
Borotn
Bgen Jur
Shnher
Barkushat
Ghapan
Vorotn河
Ernjak
Nakhchewan
Daran Dasht
(Alā Tāq)
Maku
Berkri
Arhberuni
Vasparakan 州
ヴァン湖
ウルミヤ湖
Jugha
Ordubad